HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌとジェンダー
Author(s)	小野寺, 理佳
Description	第3章
Relation	現代アイヌの生活の歩みと意識の変容 : 2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書. 小山透編著
Citation	北海道アイヌ民族生活実態調査報告 : Ainu Report, その2, 61-93
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48974
Type	departmental bulletin paper
File Information	AINUrep02_005.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第３章　アイヌとジェンダー

小野寺理佳

名寄市立大学保健福祉学部教授

はじめに

本章ではアイヌの人々の生活史と意識をジェンダーという視点から考察する[1)]。以下においては、大きくふたつの部分に分けて検討を進める。前半では、アイヌとしてのアイデンティティに関わる経験と意識を考察する。アイヌとしての自己認識や日常生活におけるアイヌ文化との関わり、アイヌとしての将来展望に関する男性・女性の回答のありようを比較検討する。後半では、これまでのジェンダー研究において関心を集めてきた重要な問題、即ち、教育、就労、結婚というライフイベントに焦点をあて、アイヌの男性と女性がおかれている立場がどうであったのかを明らかにしていく。

本調査ではジェンダー意識を直接問うような質問をとくに設けてはいないため、日常生活あるいは成長する過程において、男性と女性が経験してきたものや感じてきたことの違いを取り出して整理しながら、彼らを取り巻く環境や人間関係においてジェンダー秩序がどのような形で働いていたのかを探り・推察していく作業が中心となろう。男性と女性のありようの違いは年代によって大きく規定されるため、年代と性別を組み合わせた表を適宜掲げる[2)]。インタビュー内容をまとめた表については、紙幅の関係上、典型的な回答や特徴的な回答など主なものを選択して掲げることとする。

第１節　アイヌとしてのアイデンティティ

第１項　アイヌとしての現在

インタビュー対象者の総数は 112 人（アイヌ 95 人）、男性 56 人（アイヌ 53 人）、女性 56 人（アイヌ 42 人）である。配偶関係、職業、家族状況は表３－１の通りである。以下においては、これらの人々について、アイヌとしてのアイデンティティおよびその形成に関わる経験を問うた結果をジェンダー視点から見ていくことにする。

現代のアイヌにおいては混血が進んでおり（表３－２）、血筋のうえでもライフスタイルのうえでも、アイヌとしての揺るぎないものをもつことは難しくなりつつある。そうした状況において、彼らはどのような場面において自分をアイヌとして意識するのだろうか。「日頃、自分をアイヌとして意識することがあるか」という直截的な問いに対しては全体の３分の１が意識しないと回答し、若い世代ほどその傾向は強い（表３－３）。しかし、「どのようなときに意識するか」と重ねて問うと､多くの人々がアイヌであることに関わる様々な思いや経験を述べる。おそらくは「意識する」という表現に「囚われている、気に病む」というニュアンスを感じたために否定的な回答が増えたのであろうが、現実には、アイヌであることを意識する・させられる場面は少なからずあることがうかがえよう。

表３－１　現在の職業・家族状況　　単位：人

		未婚	既婚・再婚	離・死別	現在の職業	家族状況
青年	男性	8	8	1	介護福祉士、パソコン教師、学生、自動車販売・修理板金、寝具卸自営、製造工員2、携帯電話会社員、漁師、建設業、自営業、配送、ダンプ運転手、無職4	札幌在住者に一人暮らしが1ケースある他は同居家族あり。
	女性	6	5	1	事務パート、スナック自営、競馬場イベント係員、コンビニ店員アルバイト、販売パート、公務員、事務員2、農業パート、郵便集配、専業主婦2	札幌在住者に一人暮らしが1ケースある他は同居家族あり。
壮年	男性	2	13	2	地質調査技師、ドコモ技術系、地方公務員、木版画家、農業3、大工自営、建設業、スーパー、プロパンガス販売店社員、土木関係、製造工員2、漁師＆加工、役場（嘱託）、無職1	既婚者は妻、未成年の子どもと同居。進学や就職で別居の子もあり。
	女性	1	14	10	知的障害者施設、市の事務（嘱託）、私服警備員、販売パート、アイヌ関係イベント自営、相談員、庭のデザイン、自営手伝い、居酒屋パート、農業2、介護職、パート、ホテル接客業、病院看護助手、町の事務職員、美容師、清掃、専業主婦3、無職4	離別経験者が9（うち再婚者1）。離・死別者の多くは親あるいは子どもと同居。
老年	男性	0	19	3	自宅で絵の教師、化粧品卸、ビルオーナー、農業土木コンサルタント、家電修理サービス、飲食店経営兼土木建設業作業員、砂利砂販売、造園業自営、造林、農業2、牧場自営、無職10	妻と同居。子どもの多くは地元を離れ別居。
	女性	0	8	11	アイヌ相談員、清掃員、工芸品製作卸、ホテル風呂管理、専業主婦2、無職13	配偶者との死別は女性において男性より多い。

表３－２　アイヌの血筋　　単位：人

		本人	本人の母	本人の父	配偶者	配偶者の母	配偶者の父
青年	男性	17	12	8	1	1	0
	女性	9	8	2	3	0	3
壮年	男性	15	9	12	5	4	4
	女性	19	17	11	8	4	8
老年	男性	21	13	14	7	8	7
	女性	14	13	12	6	3	5
合計		95	72	59	30	20	27

表３－３　アイヌとしての意識　　単位：人

		有	無	無回答	計
青年	男性	9	8	0	17
	女性	4	7	1	12
壮年	男性	10	7	0	17
	女性	17	5	3	25
老年	男性	19	2	1	22
	女性	14	3	2	19
合計		73	32	7	112

アイヌであることを意識する主な場面はおよそ３つある。１つ目は、アイヌがテレビや新聞のニュースで取り上げられたときやひとの話題にのぼったとき、２つ目は、自分の容姿の特徴を思い出したときや他人にそれを指摘されたとき、３つ目は、アイヌの文化に触れたときやアイヌ関係のイベント・講演会などに参加したとき、である（表３－４）。

１つ目の場面への評価は本人がアイヌであることをどのように受容しているかにより影響される。快不快の感情はともかく、自分がアイヌである事実を無視することは難しいことを知る瞬間といってよいだろう。２つ目は、どちらかといえば、マイナスの感情とともに語られる。世代を通して、「髭が濃い」「毛深い」「彫りが深い」ことが挙げられている。とくに、女性は男性以上に自分の外見的特徴を気にする傾向があるように思われる。これまで、我々の社会は、女性に対し

表３－４　アイヌであることを意識するとき

		意識するとき
青年	男性	・TVで見たとき意識する（なにかで）。 ・今は、アイヌであることを誇りではないが大切にしていきたい。今まで文化に触れてこなかったが社会人になって意識するようになった。 ・報道でアイヌの権利についてニュースを聞いて。アイヌアートプロジェクトの講演で会場設営などの手伝い。北大の講演会。 ・日常では特にない。行事とかするときはアイヌだって思う。歴史を勉強するとアイヌに不利益があったので平等にすべき。不平等を正しくしようと思う。これを周りに訴えるときに自分はアイヌだと意識する。 ・髭濃いかなと思ったが、多分あまり考えたことはない。テレビでアイヌのニュースが流れると気になる。子どもが学校の副読本でアイヌのことが書いてあってそれを習いアイヌについて尋ねてきた。アイヌのことを隠すのはよくないと思い、自分も子どもにもアイヌの血が受け継がれていることを話した。
	女性	・写真を撮ったとき（和人との顔立ちの違い、ハーフに間違えられる）。 ・あまりない。ニュースを見たりすると「ああ、アイヌのニュースだ」と思う事もあるがその程度。 ・この1年母親の影響でアイヌ協会の色々なイベントに参加することで少し意識するようになった。 ・アイヌ協会の事業、文化祭、踊りなどの活動をしている。 ・アイヌ協会に入って。父の実家に行って何となく。
壮年	男性	・あまり考えたことはない。就職してから言われたことがある。「そっち系だよね」といわれると、睨み返す。 ・普段、TV、新聞では気になっている。 ・時間に遅れた時、酒を飲んで喧嘩している時、アイヌに足を引っ張られた時悲しくなる。 ・いつも、日常的に意識している。 ・普段はあまりないが、アイヌの話をされる時に不快感を感じる。差別されたことはない。ネガティブなイメージがあるので「アイヌ」という言葉は好きではない。 ・顔付きや体毛など身体的特徴を子どもの頃プールの授業で友人から言われた。成人してからも半ズボン等をはくと周囲から指をさされる事があった。そのような時にアイヌ民族であることを意識した。 ・普段はなし。結婚などの特別な時に意識。父の考え「自分のアイヌの血を薄めたい」。
	女性	・特になかったが、ピリカコタンで勤め、アイヌ協会に入ったのがキッカケ。刺繍とかも好き。ここで働いたことがキッカケでアイヌと言えるようになった。それまでは言えなかった。今は全然恥ずかしくない。アイヌだと言える。 ・帰省で墓参りの時。葬式の時。田舎で知り合いに会った時。子どもたちの学費（奨学金）の申請書を書いている時。ピリカコタンに行った時。 ・毎日（今は）。30代中間以降から。いい意味でのアイヌ民族としてではない。仕事、作るモノは意識している。踊り、歌をすることでアイヌと捉えていた（以前）。最近は、和人の世界→アイヌ、アイヌの世界→和人と揺れ動いてる（自分は和人?　アイヌ?と意識）。 ・日常で（歩いている時）周りが見る時意識される。しかし、気にせず、明るく生きようと心がけている。 ・長男が学校で体毛が濃いことからクマといわれ、そのことで悩んでいる。支部で仲間と踊り、刺繍の時。 ・普段はあまり意識せず全くない。子どもの教育支援・住宅支援は自分がアイヌの血筋があるから受けられるので良かった。 ・毛深いことがコンプレックスだった。 ・土地柄周りにアイヌが多く、日常会話・食べ物などで意識する。 ・仕事をしている時（特に道外に出かける時）。民族の着物を着て人前に出る時。 ・協会の行事など（刺繍、踊り、カムイノミ）に参加しているときに意識する。
老年	男性	・学生時代はなかったが、阿寒の観光地でアイヌという言葉・踊りをみて自分を意識するようになった。 ・物心ついたときから。アイヌ部落で生まれ育ったので1/2とか1/4とか細かい割合は気にしなかったけど自分はアイヌであるということは認識していた。 ・自分の身体で胸毛が濃いのを見るとき。TV等でアイヌのことを取り上げられているとき。祭司をやっているとき。 ・子どもの頃は「アイヌ、アイヌ」と言われていた。子育てが始まってから考える暇がなくなった。「アイヌ」という言葉はまだ差別を思い出す。 ・アイヌ民族であることを恥ずかしいと思っている。小2から小3の時に学校を転校した際に、いじめを受けた。 ・小学校に上がり、自身の容姿などから更に意識するようになる。
	女性	・体毛が濃い点で血を引いていると思う。 ・外見くらい。毛深いといわれた。 ・嫁にいく前まではいじめ等により意識。先祖がわかり今は誇りに思っている。 ・アイヌ協会の踊りを見ると小さい時に踊っていたなあと思う（釧路、旭川などで）。自分もアイヌ民族の一人なのだと感じる。 ・着物を着て、踊っている時。今は、かっこいいなぁと思える。 ・友達皆アイヌ。お祭りで、駅で汽車から降りたときに「アイヌ来たって」言われた。いじめられた。

て外見上の魅力を求め、その評価が女性の生きやすさを左右してきた歴史をもつが、女性に対するこうした視線がいまだに彼女たちを縛っているといえる。３つ目は、１つ目と２つ目とは逆に、アイヌの歴史、伝統、芸術などに積極的に参加する場合であり、アイヌへの関心やアイヌであることを自分のアイデンティティとして大切に思う気持ちに支えられている。子どもの頃からさま

表３－５　ふだん実践しているアイヌ文化

		内容
青年	男性	・曲作り（ムックリ、トンコリの音を使い、モダンな感じ）。昨年までアイヌ語の勉強をしていた。カムイノミ、夢見。 ・色々なものに命、魂があると考えられている。だから大事にしようと思う。アイヌの神様が一番上と自分の中で考えている。亡くなった方の命日のお祈りはアイヌのやりかたで行う。家での祭壇に果物お水（お酒）をお供えしてお祈りする。 ・先祖吉村イカシトカンの育てていたアイヌ犬の子孫を飼育している。年に1回は白老にイモシトを食べに行く。 ・ウタリ協会イベントには参加。イナウの講習会が木、金にある。支部長と一緒に助手として教える。
	女性	・踊り、歌、工芸（木彫、刺繍）、祭事（カムイノミ）に参加している。夢見、口承文芸。先祖供養、神聖な場所への祈り（鵡川）。 ・料理は覚えたい。料理教室は2回出た。アイヌ語教室。 ・イモのでんぷん団子。 ・役場に誘われて今年10月の「シシャモ・カムイノミ」に参加して、アイヌの舞台を観た。
壮年	男性	・普段いつもやるのは、アイヌ語でカムイノミする。火の神と道路の神に。タバコの火と煙でカムイノミする。トゥスクルの能力がある。酒を飲むと落ちる。近しい誰かが死んだりすると分かる。 ・カムイノミ（祈り）。年に6～7回、自然の一部だと知る。版画・ユーカラ・先人の文化。 ・アイヌ協会に入っている。木彫りとか。 ・対雁（江別市）の樺太アイヌの供養祭を毎年実践している。動物や物の霊送り、カムイノミ、地鎮祭、新築祝い、先祖供養、イナウを捧げる、海川山のタブー、アイヌ料理。 ・木彫りに挑戦中（実践講座）。 ・支部の保存会（アイヌ語・ユーカラ・踊り・儀式）、鵡川アイヌ文化祭でアイヌ語で劇。
	女性	・山に入るときお祈りをする。アイヌの音楽のリズムを聞くと自然に手足が動く。 ・食べ物は日常的に取り入れている。食べ物はおいしい。ペネイモ、オハウ、イナキビなど。 ・刺繍。派遣講師として、行っている。生活は全部アイヌ一色。 ・祖母にアミニズムの考え方、人間への愛であったりを教わった。 ・アイヌの刺繍、踊りもしていたが見るのが好き。イチャルパ（お盆（8月）お彼岸（9月））もやっている。 ・刺繍、トンコリ、ムックリ、踊り。 ・工芸（着物を縫った）。毎年のようにウタリ協会の運動会に参加する。豊平川のアシリチェプノミに参加。 ・アイヌ語、刺しゅう、踊り･うた保存会で解説している。 ・親からの意識として、知恵や料理とかを受け継いだ。
老年	男性	・アイヌ語・ユーカラは先住民族大運動会でやっている（主催者として）。 ・木ぼり（クマ・シカ）。二風谷で習う。 ・朝、太陽の方向にイナウを捧げる。そして、オンカミをする。イナウは、自身の手作り。 イヨマンテの精神を大切にする。ヌサバを老人ホームの一階につくる。 ・祭司、彫り物（エトゥヌプ：カタクチ）→4年計画で製作中。コンテストに出したい。バスイは彫らない。彫刻刀は使いたくない。熊胆も作った。 ・カムイノミ、10人程の仲間でチセを持っている（汐見に） ・ヒゼン（碑前）祭、石を祭っている。イナウなどを立てて先祖を供養している。 ・イナウをつくる練習。カムイノミに参加。 ・カムイノミなどの祭事・伝統的な婚礼、地鎮祭、新築祝い、伝統的な葬儀、先祖供養など協力していくものはして行きたい。
	女性	・踊りをやっている。若いときにやっておけばよかったと思っている。 ・刺繍。鎖彫り。料理（オハウ・ルル）、カムイノミ、年に1度イチャルパ参加、（層雲峡）踊り（アンコラチメノコウタラ）に参加。夢見を大事にする。 ・動物や物の霊送り、カムイノミなどの祭事、神聖な場所への祈り、海・川・山でのタブーや約束事、夢見を大事にする、ユーカラなど口承文芸、歌・踊り、工芸、料理。 ・アイヌ文化協会で新しいサケを迎える儀式などをしている。長い間途絶えていたのを復活させた。料理を作ったり、この頃は刺繍をやったりしている。 ・ 40歳過ぎからはじめた縫い物で理事長賞をもらった（2回）。 ・昔食べたものを作ってみる（懐かしさを感じる）。手さげ・ハンカチをお友達と作る。アイヌ語。お祈り、先祖供養。

表３－６　今後関わってみたいアイヌ文化　上位５つ　（複数回答）　　単位：人

		工芸（編み物、刺繍、織物、木彫）	歌・踊り・楽器	アイヌ語	伝統的な葬儀・先祖供養	カムイノミなどの祭典
青年	男性	7	6	3	1	2
	女性	5	2	3	0	0
壮年	男性	4	5	5	2	1
	女性	15	9	9	5	4
老年	男性	7	6	8	5	6
	女性	6	7	4	2	1
合計		44	35	32	15	14

ざまな文化活動に参加してきた者もいる一方で、大人になってから関心をもつようになり、活動を重ねながらアイヌであることを誇りに思うようになった者もいる。いずれにしても、女性においては、手芸や料理やファッションなど日常生活の延長線上にあるものとしてのアイヌ文化に親しんだことをあげる者が男性よりも多くみられ（そこには娘と女親の親密な関係が大きく影響していると思われる）、政治的な動きとはまた別の、生活に根差した文化への関心がアイヌとしての意識を覚醒させている。

では、上記３つ目の場面に関わって、具体的に彼らが普段どのようなアイヌ文化を実践しているのかをみてみよう（表３－５）。男女がそれぞれ実践する文化はあまり重ならず、男性は、カムイノミなどの祭事、伝統的葬儀、先祖供養といった儀式の分野、女性は、踊り、歌、料理、刺繍、工芸といった芸能・生活文化的な分野に集中している。これは個人の趣味・志向の違いではなく、アイヌの伝統文化における男女の配置と役割の分担に従った結果といえよう。男性は、これらの儀式を行うことで、アイヌの精神文化を後世に伝えたいという使命感を語り、一方、女性は、使命感というより、懐かしさの再現であったり、自分自身の生きがいや楽しみであったり、仲間と時間を共有することであったり、もう少し個人的でリラックスした理由を掲げている。

ただ、今後関わってみたいアイヌ文化を問うと、この男女の境界が流動化しているように思われる（表３－６）。すなわち、男女とも、アイヌの歴史やアイヌ文化やアイヌ語の学習への関心がみられ、伝統文化をただ守るのではなく、その意味を知ったうえで広めたいと考えるようになりつつある。加えて、男性においては、歌、踊り、楽器への興味が表明されている。近年、アイヌ・バンドが登場し、伝統芸能という括りではない形でのパフォーマンスが若者を中心に受け入れられているところから、こうした活動が魅力的に映るのではないだろうか。また、工芸（編み物、刺繍、織物、木彫り）や料理への関心も高い。これらはいずれも、従来、主に女性が携わってきた分野である。しかし、女性においては、男性が担ってきた儀式への参加を望む者はおらず、料理や刺繍など「女性の務め」的に取り組んできたものを継続していきたいという声が多い。伝統文化に関わる男女の境界侵犯はアンバランスな状態にあるといえるだろう。

第２項　アイヌであることの自覚形成

さて、日常生活のなかでアイヌであることがいろいろな形で意識されるのは、自分がアイヌであることを知っているからである。その時期やきっかけを問うたところ、多くは小学生の頃に自覚を得ている（表３－７）。青年層においては、とくにきっかけもなく「自然に」そのような自覚

表３－７　アイヌであることを自覚した時期　　単位：人

		誕生時	小学校入学前	小学校低学年	小学校高学年	中学校	中学校卒業後または高校	高校卒業～20代	30代以降	自然に	無回答	計
青年	男性	0	0	5	1	1	3	3	0	4	0	17
	女性	0	2	2	1	0	0	3	0	1	1	10
壮年	男性	1	5	3	0	1	0	2	0	2	1	15
	女性	1	0	4	6	1	1	2	2	3	0	20
老年	男性	1	4	9	0	2	0	3	0	2	0	21
	女性	1	6	1	3	2	0	1	1	0	0	15
合計		4	17	24	11	7	4	14	3	12	2	98

表３－８　アイヌであることを自覚したきっかけ（複数回答）　　単位：人

		身近な人々			環境	アイヌ協会の関係	アイヌ文化	外見	いじめ	結婚	自然に	覚えていない	自覚ない	その他	M.T.
		親から	親以外の家族から	友人他から											
青年	男性	6	0	4	1	1	4	0	0	0	4	2	1	2	25
	女性	3	3	1	1	1	0	1	1	1	4	0	2	1	19
壮年	男性	4	3	4	1	1	5	0	0	1	3	0	1	3	26
	女性	6	4	3	2	1	8	4	1	1	2	0	1	2	35
老年	男性	0	5	6	3	1	6	3	4	3	3	0	0	1	35
	女性	3	4	5	0	1	2	4	4	0	1	0	0	2	26
合計		22	19	23	8	6	25	12	10	6	17	2	5	11	166

をもつようになったという回答の比率がやや高いものの、全体をみると、そのきっかけや経緯は主に３つある（表３－８）。

１つ目は、親、祖父母、その他の親族、友人である（表３－９）。意図的であったにせよ、そうでなかったにせよ、身近な人々が直接「アイヌであること」を伝えている。これが最も多い。男女差はみられない。２つ目は環境、具体的には、アイヌ文化やアイヌ協会、あるいはそれらに関わりのある人々の存在である（表３－10）。つまり、アイヌの文化に触れたり、行事に参加したりすることから徐々に気づいていくというものである。親や親族がそうした活動に参加しており、それをきっかけとして子どもも参加するという流れが多い。自身にこうした活動との接点がなくても、それに参加する人々の存在を日常的に見聞きすることで自然に理解していったという例もある。親から直接知らされておらず、周囲の状況から知ったという者は男性にやや多い。男性においては、親や親族などの親しい人々との密なコミュニケーションによる情報伝達が女性ほど多くないとすれば、こういう形で知ることもあるだろう。３つ目は外見である。これについては、自分でその特徴に気づいただけの者もいれば、このせいで他人からいやな思いをさせられた者もいる（表３－11）。不快な思いを経験するとなおさらに、アイヌであることがいやな記憶とともに深く刻み込まれる。これを挙げているのは女性の方に多くみられる。前述のように、男性より女性において自分の外見によってアイヌであることを意識する者が多いのは、従来「見た目」が男性以上に重視されてきた女性だからこそといえるだろう。

このように、アイヌの人々は何らかの経緯でアイヌであることを自覚するに至り、アイヌ文化

表３－９　アイヌであることを自覚したきっかけ（1）

		身近な人々（親、祖父母、その他の親族、友人）
青年	男性	・小学校くらいで親に言われた。 ・大学前に知った。お母さんから聞いた。ウタリ協会の奨学金を借りるのをきっかけに知った。びっくりした。教科書で知っていただけだった。 ・13歳（中学1年生）の時、社会科の授業で家系図を作ることがあり、祖父の母の名前がアイヌの名前だったので、両親に聞いた。 ・友達に言われ意識したが、「そうかな？」と思った。 ・小学校位の時に気づいた。父から自分は「アイヌだよー」と言われたから。 ・友達同士でアイヌ、アイヌと言い合っていたのがキッカケ。遊んでいる時に、アイヌっていう言葉を聴くにつれて意識。 ・父から知らされてから。山菜取りが好き。昔から虫取り、魚取りは得意だったので、これもアイヌだからなのかなと思った。
	女性	・お父さんから「アイヌの血が入っている」と言われたが、小さいころから知っていたような気がする。 ・母方の祖母が亡くなったとき、家計図などを見て自覚。 ・母隠していた（父親（本州の人たち）の母が厳しい）。家族（父母）とアイヌについて全員で話したことはない。告げられたことはないが、母方のおじいちゃん、おばあちゃんを見ていて「あ、そうかな」って気づいた。 ・父の実家で。 ・20歳で結婚するときに、父方の祖父から「お前もだ」といわれたので。
壮年	男性	・弟が奨学資金をもらったことで意識した。それから両親がアイヌ文化に関する活動をして楽しんでいるようだが、自分には関係がない。 ・周りはみんなアイヌで普段の言葉でアイヌ語がまぎれていたので分かっていた。父親は差別されたくないからとギョウジャニンニクを決して食べず、そのことを自分に話したこともあった。 ・父がクマの木彫りしていたから、その前から何となくわかってた気もする。 ・アイヌ民族の1人だと知ったのは子どもの頃で、親から聞かされた。 ・祖父の名前が熊太郎、猟師をしていた。 ・妻の母に反対されて、妻の父は「娘が好きならいい」と。自分の父は一切アイヌのことを言わなかった。周りから少しずつ聞いたり。
	女性	・祖母の影響。 ・おばあちゃんがそうやって言っていた。 ・20代半ば、結婚し出産してから母にウタリ協会の会員であることを言われた。 ・両親のケンカ「アイヌだからバカにしているのか」。 ・戸籍を見た時、祖母の名前がカタカナだったこと。日常会話でアイヌ語がでるが、それはアイヌを意識したことではない。アイヌであることに気付いてないわけではなかった。自覚という意味では今もない。そもそもどこまでがアイヌで、どこまでがシャモなの？
老年	男性	・妻と結婚の際、反対運動が起こったことがきっかけで自身がアイヌであることを強く意識した。 ・家族がそうだったため。 ・家にアイヌの人がくる。まごばあさんが、アイヌの話をした。 ・喧嘩すると「アイヌアイヌ」と言われた。普段は楽しく遊んでいた。 ・まごじいさんもアイヌだし、誰も言わなくてもわかる。 ・14歳～15歳の時におじさんから聞いた。
	女性	・お母さんから小さいころに聞いた。 ・旦那さんのお姉さん（アイヌ）とあって話すようになってから、「そうなのかも（アイヌなのかも）・・・。」と思うようになった。

表３－10　アイヌであることを自覚したきっかけ（2）

		環境（アイヌ文化、アイヌ協会、それに関わる人々の存在）
青年	男性	・直接「アイヌなんだよ」と言われたことはない。カムイノミに連れていかれたりとかして、自然に。 ・小学校の低学年で認識した。ポロトコタンで踊ったり、縫い物をしている人がいて、流れる音楽を普通に聞いていた。音楽を揶揄する人もいたが、自分にとっては普通だった。親から直接アイヌであることを言われたことはなかった。 ・親がウタリ協会に入っていた。 ・母の活動に参加して、皆で舞って踊るので違うと気がついた。 ・儀式に参加する中でこういう人の仲間なんだと自然に認識（嫌悪感なし）。 ・体育大会のときにアイヌと言われたことを覚えているが、その時は、はっきりと自覚したわけではなかった。名字で自分がアイヌであることを分かったが、どのような経緯で分かったかは覚えていない。父や祖母はアイヌであることを話さなかった。
	女性	・母親の影響でアイヌ協会の行事に参加していた。 ・物心ついたころから活動していた。
壮年	男性	・自然とそんな風に感じた。アイヌの血が入った人が半分位で多いからいじめられることもなかった。 ・おばあさんの衣装や行事についていくなど、日常的な経験から。 ・祖母の入れ墨がきっかけ。カムイノミや道具があった。 ・母と弟がアイヌ協会に入っていた。アイヌについて意識するようになった。アイヌの人が多い地域で生活していた。 ・子どものころからアイヌだと言われていたから、アイヌの単語を使っていたし、どう考えてもアイヌだよなぁと思っていた。劣等感もなかった。
	女性	・小学校高学年の頃、衣装着て踊り始めた。体が踊ることを求めている。民族舞踊は見て覚えた。 ・単純レベルのアイヌ語が身近にあったことも。 ・34、5歳くらいから（仕事を始めてから）、アイヌ文化関係団体に入り、民族衣装を身に着けたときに「そうなんだ」と思った。アイヌ文化施設に勤めるようになり、儀式に参加するようになってから。母も入っていた。 ・父母から聞いてないがイチャルパとかイナウをしているのをみて違うと思った。またシャモの人に何しているの？と聞かれたりした。また住んでいる所がアイヌコタン。祖母、姉2人の写っている写真を見てチセが写っていた。刺繍の着物を着ていた。というものもきっかけになるかもしれない。 ・母親のアイヌ文化の行動（言葉や機織り）を見て。 ・常に意識していたと思う。祖母も母親も着物とか木彫りをしていたので、小さいころから見ていた。 ・2歳くらいの時に子どもをつれて歩いたら、ウポポを歌っていた。輪おどりに入っていた。人の前で踊るというよりまじっていた。 ・小3で、外国雑誌の取材があり、アイヌ民族の学校として自分の写真が載った。
老年	男性	・阿寒湖でアイヌ語や木彫りの文様を見たり、踊りを見てアイヌ文化が分かってきて初めて自覚する。1976年にパリでユーカラ劇を20人ぐらいで12日間公演している中で、より民族意識が高まってきた。民族衣装を着て世界各国の人に見てもらうのは練習の時とは全然違う。 ・村落の中で入れ墨をしている方や儀式にふれるなど生活の中で脈々と培われていった。意識して教育されたものではなかった。 ・イナウや耳飾などアイヌ文化の中で育ってきたため。 ・周りから言われたから（親には確認していない）。 ・ウタリ協会の支部が発足した頃。S45年頃のこと。ウタリ協会に入らないかと誘われて。 ・祖母が口を染めて入れ墨をしていた。 ・村でアイヌ語を聞いて。 ・周りにアイヌの人が多いなという自覚。口を染めた婆さんがいた。
	女性	・長沼に行った時、自分のルーツを自覚した。 ・母と近所のおばあちゃんがウェペケレをしていた（日常的に）。 ・父親－アイヌ彫。 ・18歳のとき、ウタリ協会が出来た頃。姉から。小学校のときに授業で気づいた。

表３－11　アイヌであることを自覚したきっかけ（3）

		外見
青年	男性	回答なし
	女性	・バイト先に来た人から「アイヌか？」と聞かれ意識。本屋で本を見たところ親戚に顔が似ていて確信した。母親はあまりアイヌについて語ることがなかった。
壮年	男性	回答なし
	女性	・顔つきが違うとか、毛が濃いのはアイヌだと。両親は大きくなれば分かるからと、アイヌであることを積極的には教えなかった。アイヌは優れた民族だと母親に言われた。身体的には恥ずかしかった。「どうして、足に毛が生えているの？」と聞いたら、頭のいい証だと言われた。 ・周りをみていて鵡川は顔が濃い。シャモと顔立ちが違うのが明らかで自分も気づいていた。 ・経営者やお客さんから「あなたアイヌなの？」と初めて聞かれ意識するようになった。「毛深いね」などとアイヌに対する固定観念からくるようなことを言われた。「アイヌの人は臭う」というような根拠のないことも言われた。 ・他の人と比べて毛深い。自分の子どもに対してかわいそうと（ネガティブにとられないように）父親からみせられる。
老年	男性	・小学校に上がり、自身の容姿などから更に意識するようになる。 ・自覚は常に持っている。顔を見てそのものズバリだから。 ・風呂（本州・札幌）でシャモが多いと外見的特徴から和人と違うと感じる。じろじろ見られている気がして嫌に感じるが、もしかしたら自意識過剰になっていたかも知れない。
	女性	・バレーの大会で短パンをはいた時、自分の体毛が気になった。とやかく言われたわけではない。 ・結婚した後に、夫に「毛深い」といわれて自覚せざるをえなかった。 ・友人と遊びに行った時、店の男性に毛深いと言われた。 ・運動会で短パンを履くのが毛深いから苦痛だった。

と関わった経験がその過程において重要な役割を果たしていることが確認された。そこで、アイヌの人々が育った文化的環境をもう少し具体的にみてみることにしよう。子どものときの文化的環境は所与の成育環境として存在していたという意味で大きな影響を与えているはずである。まず、子どもの頃、家のなかにどのようなアイヌ文化があったのかを問うた結果が表３－12である。さらに、その伝統文化の担い手について問うと、祖母あるいは曾祖母の入れ墨、祖母のアイヌ語、母や祖母のアイヌ料理・刺繍、母のアツシつくり、曾祖母の踊りや歌、など母系の人々によって伝えられたものが多く記憶されている。これらはいずれも生活のなかでふれることのできるものであり、年長の女性たちの日常を子どもが見聞きするという形で伝えられている。また、近隣との家族ぐるみの付き合いのなかで年輩女性の踊りや歌にふれるという経験をして、それをきっかけとして自分も民族舞踊を始めたという女性もいる。つまり、子どものときのアイヌ文化との関わりの土台は主に女性たちによって支えられていたということができよう。そして、祖母や母の記憶は、娘たちが大人になったとき、今度は自らの選択で刺繍や歌などを楽しむことにもつながっている。

その一方、子どもが参加あるいは見聞きすることのできた伝統行事はそれほど多くはなかったよ

表３－12　子どもの頃のアイヌ文化体験　　単位：人

		アイヌ語	入れ墨 耳環	熊猟 サケ漁	囲炉裏 チセ	宝物があり大切にする	イナウ ヌササン	アイヌの神々、聖地への祈り、先祖供養	動物送り、器物送り	トゥスクル
青年	男性	2	0	1	0	0	1	0	0	1
	女性	3	1	0	0	2	0	2	0	0
壮年	男性	3	5	2	3	4	2	3	0	2
	女性	6	10	2	4	4	7	4	3	1
老年	男性	9	12	5	5	7	9	7	6	5
	女性	7	9	1	4	3	4	6	0	1
合計		30	37	11	16	20	23	22	9	10

表３－13　子どもの頃のアイヌ以外の人々との交流　　単位：人

		仲よく付き合っていた	よくけんかをしていた	いじめられた	いじめていた	かかわりがなかった	その他	無回答
青年	男性	10	0	4	1	1	0	1
	女性	7	1	2	0	0	1	1
壮年	男性	14	2	0	0	0	1	0
	女性	17	0	2	0	0	3	3
老年	男性	10	1	8	0	0	0	2
	女性	11	0	4	0	0	0	3
合計		69	4	20	1	1	7	10

うで、熊送りなどを見たことがある者は少数であり、先祖供養や葬儀の儀式に時々参加したという回答が中心である。これらの儀式に関しては、父親、母親、親族などに連れられての参加であり、大人の側に伝統に対する積極的な姿勢があるかないかによって、子どもの参加経験のありようは大きく異なっているように見受けられる。アイヌであることを子どもに伏せていた家庭もあるなかで、アイヌの伝統に親しむ大人が周囲にいるとき、子どもたちの文化的経験は広がることが可能になったと思われる。

加えて、子どものアイデンティティが形成される過程において重要と思われるのは、他者との交流である。このうち、アイヌ同士の交流については、「交流があった」という回答は全体の８割ほど、男女ともほぼ同じ数字である。これは、アイヌが集住する地域に住んでいた者が多いためだろうと思われる。隣人、親の友人、自分の友達の多くがアイヌであり、日常の近所づきあいが結果としてアイヌ同士の交流であったというケースが多い。就学前の子どもの頃には自分がアイヌであることを知らずにいた者もいるが、子ども同士の付き合いのなかでは「誰がアイヌか」ということは関係なかったと語る者が多く、アイヌとも和人とも普通に遊び、アイヌであることが取り立てて注目された記憶を語る者は少ない。アイヌ以外の人々とも「仲良く付き合っていた」が男性で約６割、女性で７割弱である（表３－13）。

このように、子どもの頃の地域の幼なじみとの関係をみる限りは、アイヌであることを理由とするいじめは数もそれほど多くはなく、またそれほど深刻なものではなかったといえる。男性ならでは、女性ならではの悩みもまだその輪郭をはっきりと示してはいない。ただし、後述するように、学校が生活の中心となり、さらに教育段階が上がっていくと、ある意味牧歌的な時代は終わり、学校のクラス内でのいじめや差別と直面せざるをえない日々がやってくるのである。

第３項　アイヌの将来について

アイヌの人々は様々な場面においてアイヌであることを意識し（させられ）、その前史には、アイヌとしての自覚を深めながら育つ子ども期がある。この時期に差別やいじめなどの不快な経験が伴うことも珍しくなかったことは上で見た通りである。それでも、彼らはアイヌとしてのアイデンティティを大切にし、アイヌ文化への関心を失わずにいろいろな文化的活動への関心を示している。しかしながら、アイヌであることを今後どのように自分のなかに位置づけていくかという点についてあらためて問うと、約３割が「アイヌとして積極的に生きていきたい」、約５割が「と

くに民族は意識せず生活したい」と回答している。「民族を意識しない」とは、アイヌであることを否定する・隠すという意味ではない。文字通り、「アイヌ民族であることと今の状況は関係ない。意識せずとも変わらない」（30 代男性）、「今まで通り、隠しもしない、意識もしない」（40 代女性）ということである。

さらに、「アイヌについて思うこと」を問うた。この問いは、アイヌであることに関わって日頃思っていることを自由に語ってもらうための質問である。回答を概観すると、アイヌであることについてのイメージ、自分なりの捉え方や心構えが述べられており（表３－ 14）、全体としては「アイヌとしての誇りをもつこと」と「アイヌ文化を大切にし、その文化を若い世代に伝えること」の重要さをあげる者が主であるが、その思いは決して単純なものではない。というのも、独自の文化が尊重されるべきであるという思いは共通しているとしても、その文化を人々にどのように、どこまで伝えるか・広めるかという点、そして、それを担っているアイヌの人々を社会においてどこまで支援あるいは優遇すべきか、という点については意見が分かれるからである。

個人レベルでは、家庭においてアイヌの歴史や文化を子どもに伝えていきたいと語る者は多いが、対社会的要求という段階になると、特別扱いを望まない者もいる。ウタリ協会（現アイヌ協会）の進学奨学金についてはその意義を評価する者は多いものの、さらなる生活支援を求める意見は決して多くはない。前述のように、約半数が「アイヌであることを意識せずに生活したい」と回答していることを考え合わせると、人々が望むことは、アイヌであることを主張しすぎず卑下もせず、文化を守りつつ特別視されず、ごく普通に生活を維持していくこと、といえるだろう。しかしながら、支援なしでは文化活動どころか生活がままならない人々がいるのもまた現実である。「生活の保障さえしてもらえれば、文化的事業ができる。」（30 代男性）という言葉もあれば、「正直放っておいてほしい。腫れ物に触るような扱いをしていると、貰い癖がつく。」（30 代男性）という言葉もある。後者には、様々な支援を求めざるを得ない状況とそれによって揺らぐ誇りとの間で苛立つ心境が見て取れるだろう。

このように、人々の思いは複雑である。こうした現状に対して、アイヌの今後を見据えたうえでの現状批判もきかれる。現在のアイヌのあり方をめぐる疑問点・問題点をあげているのは老年層には少なく、青年層・壮年層が中心である（表３－ 15）。それらの内容は、アイヌの人々が決して一枚岩ではないことを鋭く指摘している。個々人のライフスタイルが多様化しつつある状況において、アイヌとしての異議申し立てを、全員一致という形で提示することはもはや難しい時代となったということだろう。年長世代の苦労についてはそれが報われるような方策を求めつつも、自分たちについては、和人と同じ土俵に立っていると認識し、実力主義でよいという意見も出されている。そして、ここで注目すべきは、こうした現状批判が女性においてより多くなされているという結果である。女性がアイヌ社会の中心に居場所を与えられておらず、周縁としての眼で現実を客観的にみることができたからこその気づきと考えられる。現状打破の努力は十分になされているか、アイヌの人々同士の関係性はどうか、リーダーシップのあるべき形とはどういうものか、といった基本的で重要な問いかけが投げかけられている。和人妻（アイヌ男性と結婚した女性）からも批判は寄せられ、アイヌ社会の閉鎖性についての指摘がされている[3)]。彼女たちは、「アイヌ男性の妻」としてアイヌ社会の中で生きてきた人々であるが、アイヌ社会においては、よそ者として位置づけられてきた人々である。身内であり、よそ者でもあるという立場からの意見

表３－14　アイヌについて思うこと（1）

		「アイヌであること」についての自分なりの捉え方や主張のしかた
青年	男性	・「かっこいい」なと思う。日本語+アイヌ語を話せる。歌と踊りもかっこいい。今の仕事をやりつつ、アイヌとしても活動したい。 ・血筋を絶やすことは出来ない。 ・「アイヌ」について忘れられていくことがある。教科書の1ページで終わらないように広めて行きたい。 ・政策については、年長者（エカシ、フチ）に差別が酷かったので、そういう人たちの対策=年金・社会保障をして欲しい。子どもたちには、学校に通えるように塾に通えるようにして欲しい。土地の返還についてはあまり賛成しない。厭らしく見える。 ・「アイヌなんです。」と言ったときの「アイヌなの？」っていう反応をなくしたい。アイヌの事を普通に勉強している、知っているという状況にしたい。わざわざこのように調査するのはアイヌ、アイヌ文化を特別視している！おかしい。
	女性	・考えたことがないので・・・。何か違いはあるのかな？みんな同じ人間じゃないの？？アイヌの文化は大切だと思う。昔の人がやってきたこと、どういう生活なのかというようなことを残していくのはいいんじゃないか。 ・アイヌは、見た目も様々な行事で特別な人間だ。でも普通でいたい。気にして生活していないので、この様な調査があると、アイヌは他と違うんだな～と感じた。 ・特にない。アイヌであることは気にしたことはないし、差別されたこともないし、差別があると聞いたこともない。娘が毛のことで悩んでいるが、その影響を受けて下の娘も考えているらしいが、「自分でやりなさい、何とかしなさい」と放置している。
壮年	男性	・自分は積極的に活動していない。報道などでアイヌの活動を見ても、それを自分に引きつけては考えられない。だから活動しない。家庭の中では、アイヌということに関して話し合ったりはしない。 ・子どもたちには強制しない。心配事（ネットで子どもたちがひどい目にあうのでは）はある。 ・やっぱり民族性として、自分のルーツもありますから、残っていって貰いたい部分もありますけど、あんまり過度に騒ぎ立てて欲しくない部分もあります。先住民族認めるってことになったら、補償問題云々とか言われているんですけど、逆に日本の国民性としてそういうことをやってしまうと波風すごく立つと思う。 ・今紹介されているアイヌのイメージ（カムイノミなど）はよくない。もっとテレビなどで親しみやすいイメージで伝えて欲しい。それによって、アイヌに興味がなかった人も興味を持つかもしれない。
	女性	・アイヌの血が流れている者として、そういった印象（推進力など）をもって子どもたちへの文化の継承と共に外に向かって、いろんなことを比較することは必要。そうしないと文化は救えない。少なくとも若い人達にもっと言動を求めるし、私達も同じ母親なり、父親なりにコミュニティを作って子どもへアイデンティ継承についてなどを話し合う場が欲しい。大学の進学、就職、法的なことをアイヌ協会として勝ち取って欲しい。自分に自信を持っていない人が多い。子どもにも広い視野を身につけて欲しい。チャンスを生かして次のステップへたどりついてほしい。でも決して無理強いはしない。まず興味を持ってほしい。 ・差別されている人がいっぱいいる。アイヌが特別でない社会になるといい。 ・地位や能力が低いと言われるのは納得いかない。文化に対しては本当にすごいと思う。続いてきた文化を尊敬している。 ・アイヌの考え方（地球と一体みたいな）もいいところがあるが、適宜、流れにそって生きていくのがいい。シャモのいいとこ、和人のいいとこをとって、合理的に考えることが必要だと思う。
老年	男性	・政府はアイヌ文化を支えていくシステム（生活面を支える仕組み＝アイヌ文化を学び、同時に生活もできるような）（基礎）を作る必要がある。お金だけを与えても、駄目になっていくので働いて仕事をしていく中でアイヌ文化を学ぶようにする。 ・結局は、アイヌかどうかっていう線引きは自分の意識次第。 ・伝統を大事にします→最高だと思います。カムイノミは大事だ。（和人が葬式でお経を挙げるように、カムイノミが途絶えたら終りだ）見た目が変わってきた。→血を薄くしようとする人は、自分から差別している。 ・そのうち、アイヌ民族というものは、なくなると思う。アイヌとインディアンと似ている。インディアンは国からいろいろ補償されている。アイヌもそれくらい補償があっていいと思う。自身も土地を返せと思う。 ・周りにはアイヌ文化を出して生きたい人がいるけど、少数派ではないか？
	女性	・全ては差別をなくすことに尽きる。 ・特にない。自分も今までと変わらない生活をすると思うから。素敵な文化をアピールしていけばよいのではないか。和人の方達もあまり差別意識はないと思う。逆にアイヌの方々が意識している。 ・昔は差別されたが、今は重宝がられる。今、自分はアイヌを売り物にしているのかもしれない。 ・アイヌとして生まれてきたことに引け目を感じないことが大切。自分が引け目を感じないことが大事だし、周りの人達にもそういう見方をしてほしくない。誇りや素晴らしいところを子ども達に伝えていければよいと思う。 ・イヌイットのように日常の生活を保障する制度を整えてほしい。奨学金に関しては満足している。 ・シャモと同じように生活している。平成になっても差別はある。

表３－15　アイヌについて思うこと（2）

		アイヌのあり方をめぐる疑問点・問題点・課題点　＊は和人
青年	男性	・新聞記事は気になる。お金のこと、内部告発するのはなぜ？今はこういう時期ではない。ただでさえ悪く見る日本人もいるのに、もっと悪いイメージを与えている。 ・もっとみな気持ちをひとつにした方がいい。みな仲が悪く、コミュニケーションが取れていない。和人を糾弾したり排除したりする運動はいや。そういうアイヌより、アイヌの中にいるシャモの人のほうがアイヌの気持ちがわかる。アイヌの暗いイメージを植えつけるのでなく、子どもがみてカッコイイと見える民族にしたい。差別の話はアイヌじゃない人に罪悪感だけを植え付けてしまう。差別の話は耳にタコでどうでもいい。本部、支部、道外との連携が取れていない。
	女性	・彼氏については、様々なアイヌ文化を担おうとしてすごいと思う半面、夢に生きている感じで正社員になろうとしないところは不満に思う。それは自分自身がアイヌとしてではなく、普通の人として育ったから（和人として）。他方で立場を利用したり、お金目的で動いているような汚い人達がいるように感じる。 ・年配のアイヌはアル中でダメになっている人が多いように思える。 ＊アイヌと和人をどうしてやたらと分けて表現するのか、疑問に思う。分けると逆に「アイヌ」と言われてしまう。子どもに、アイヌに関わる自分の経験を話そうとは思わない。なぜなら、「アイヌってなに？」と聞かれても実際にアイヌは何をしたか知らないし、アイヌにはマイナスなイメージしかない。「アイヌ」という言葉にはすごく重くて悪いイメージがある。どうしてここまでアイヌに関して騒ぎ立てるのかわからない。 ＊穂別の地域性？他から来ると入りにくいかも？　仲間意識が強すぎる。
壮年	男性	・アイヌがアイヌの足を引っ張るのが多い。見逃せない。「アイヌで居続ける」こと、偽者を排除すること、アイヌ精神を持たないアイヌがアイヌのことをやるのが許せない。 ＊気持ちの中でアイヌの人がアイヌを差別している。堂々と生きていい時代を望むが…。 ・なかなか自分がアイヌだと胸をはって言えない状況。国の政策からお金をもらっているが、地方のボスが奪って私物化している。なぜ言えない？ここから考えていかなければならない。そう言わざるをえない環境下、独自のコトバ・文化を優先しすぎ。本来は国に頼らず自分達で何とかしなくてはならない。 ・自分は声を大にして言いたい。アイヌは働こう！権利ばっかり主張するのではなく、働けば権利がついてくる。働けば食えるだろうと言いたい。不正経理の話には頭に来る。 ・アイヌが何を主張（協会）しているのか（先住民権など）よくわからない。意味があるのか。アイヌとしての目安が「容姿」くらいしかないと思うが、混血が進むと難しい。何をもってアイヌ民族とするのか、疑問。
	女性	＊アイヌの奨学金を返さない人が多いことを批判する人は多いが、そういう人に対していやな感じだと思う。 ・マイノリティ（女性の）活動にも関わっている。今までは、アイヌだけの差別でしか見ていなかったが、女性の差別もある。差別されていると悩む前に、自分達の文化を勉強すべき。都合のいい悪いでアイヌを使い分けるのはおかしいと感じる。「アイヌだから働けない」という人がいるが、それ違うと思う。身近に多いと思う。アイヌ同士の差別もある。 ・「アイヌ」は好きだけど、「アイヌ民族」というかアイヌの先頭に立ってやっている（つもり）の人が嫌い？アイヌが「アイヌ」として括られて見られてしまう現実がある。政策やらなにやら、上のアイヌのみ受けられるものでなく、全員に行き渡らなければならない。恵まれて居ることをコヤシにしている人がいる。自分達の世代にも、今は下の世代にも自分達だけという姿勢がある人がいる。アイヌをやるだけ嫌いになる。 ・メディアに出ている人はアイヌだと言って収入を得ている。一部の人が潤っても言った方が勝ち。潤っている人がアイヌを変えようとしても胡散臭い。 ・アイヌ会員になって、イジメ、差別をおぼえる（アイヌの人たちは、マイナス思考）。貧乏とか思われるのは嫌いと外に発信しているにも拘らず、仲間には同じことを言うのが腹が立つ。 ・今の運動では何人がやりたくてやっているのか。報酬やお弁当目当てではないか。本当にやりたい人が何人いるのか?と思う。アイヌ自身が変わっていかなければならない。国に変われ変われだけではなく自分たちで変えていかなきゃという気持ちで変わっていかなければならない時期だろう。 ・子ども達が積極的に文化に触れられるよう、親の意識がないとダメ。環境づくりしないとダメ。お金がもらえるからやる人も。損得なしに文化だけって言うのはない。
老年	男性	・アイヌとシャモを対等にしていきたい。シャモのおかげでやってきている部分もあり、シャモがいなければ何も出来ない。昔のこと（アイヌ差別など）ばかり言うのはなぜなのか。すでに多くの支援をうけているのに、「もっとほしい」と言っているように聞こえる。まず「ありがとう」という姿勢も必要なのではないか。
	女性	＊文化も保存も大事だけど自分で働いて稼ぐことが必要、努力している。アイヌにはお金ではなく仕事を、汗をかいて働くことを教えてほしい。どうしようもなく、みっともない、金を取り合う。アイヌ協会は、平成に入ってからお金になるようになってから難しくなった（仲間割れするように）。 ・Aさん（ご主人がアイヌ）のこと。アイヌ協会の本部いわく「夫死んだらアイヌじゃなくなる」ので正式な会員にはなれていない（活動はしているが）。許されないこと。そういう分裂するようなことをいうのはだめ。

には耳を傾けるべきものがある。

さて、こうした問題点・課題点の解決のためには、この社会においてアイヌの人々がより暮らしやすい条件を整えることが必要である。彼らが国や道に対して望む政策とはどのようなものなのだろうか(表３－16)。アイヌのための政策であるため、すべてについて賛成意見が多い。ただし、概観すると、男性においては世代、女性においては居住地による温度差があるように見受けられる。つまり、男性においては若い世代ほど、女性においてはむかわ在住者の方に批判意識が強い傾向があり、賛成以外の意見はこれらの層から多く出されている。このことをふまえて、政策毎の回答状況をみていこう。

表３－16　国や道に望むアイヌ政策　○（賛成）と答えたひとの数　　単位：人

		ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	シ	ス	セ	ソ	N
青年	男性	11	6	6	3	8	10	5	6	5	1	6	2	4	2	2	17
	女性	6	5	6	2	6	5	5	5	4	2	7	3	4	3	2	12
壮年	男性	9	12	5	3	7	4	7	6	10	7	8	4	8	3	5	17
	女性	13	21	11	7	10	10	14	5	4	3	9	6	9	9	6	25
老年	男性	12	9	8	4	5	9	8	5	7	4	6	5	8	12	7	22
	女性	11	9	8	4	10	6	13	8	6	7	9	7	9	10	6	19
合計		62	62	44	23	46	44	52	35	36	24	45	27	42	39	28	112

ア　学校教育にアイヌ民族のことを盛り込む
イ　アイヌ子弟の大学への進学機会を拡大する（奨学金や優先入学制度など）
ウ　アイヌの人々がアイヌ文化に触れることが出来る機会を増やす
エ　地名をアイヌ語で表記する
オ　工芸織物技術が次の世代に受け継がれるように技術の向上、人材育成を図る
カ　観光を盛んにして、アイヌ文化が国内・世界に広く知られるようにする
キ　働く場所や機会を提供し、自立できるようにする
ク　自治体と協力し、アイヌ文化を通じて地域を活性化する
ケ　文化を受け継いでいく為に、土地を利用し、公有地や川で草木や魚をとれるように
コ　土地資源をアイヌ民族に返還する
サ　アイヌ民族について研究する組織を作り、アイヌ民族出身の研究者を養成する
シ　大学等に保管されている遺骨を国が慰霊する施設を作る
ス　アイヌ民族と国がアイヌ政策を協議する場を設ける
セ　国会や道議会にアイヌ民族特別議席を設ける
ソ　その他

人々がとくに関心を寄せるのは教育政策である。これは、アイヌについての無知や誤解がもたらす問題、アイヌ子女の教育水準の相対的な低さがもたらす問題の解決を人々が切実に願っていることを示しているといえよう。まず、教育政策としては「学校教育にアイヌ民族のことを積極的に盛り込む」と「アイヌ子弟の大学への進学機会を拡大する」への賛成意見が多い。アイヌの歴史や人権について知ることは偏見や差別から解放される第一歩となり、教育を身につけることは未来を拓くことにつながるということである。ただし、進学機会の拡大に関しては、奨学金には賛成するが優先入学には反対、という意見が目立つ。つまり、能力と意欲のある者に奨学金を与えることには賛成であるが、優先入学はむしろ「逆差別」であるとしてその必要を認めないという考え方である。

男性と女性の回答の仕方を比較してみると、基本的な賛否の傾向については大きな違いはない

ものの、その回答内容をみると、男性の意見はやや一般論的であり理想主義的であるのに対して、女性の意見の方は、とりわけ壮年層において個別的・具体的・現実的であるように思われる。たとえば、学校教育については、アイヌに関する知識を与えることでかえって差別が生まれる可能性や、アイヌについて教えるにふさわしい教育段階について言及している（表３－17)。また、進学機会についても、女性の回答においては、アイヌの人々の優遇が周囲に知れると差別が助長されるという心配や、奨学金の額が十分ではないための苦労、大学進学だけではなく高校や専門学校への進学について求められる支援などが具体的にあげられている（表３－18)。就学中の子をもつ母親の年代では、自分の子どもの学校生活を身近に知っているところから、どちらかといえば私的な関心事項として語られることになったと思われる。

この教育機会の拡充は就労につながる問題であり、就労政策として「働く場所や資金を提供し、自立できるようにする」ことを望む声も多いが、これについては、とくに若い世代の男性において、逆差別であるとして必要ないという回答が他よりも多くみられる。彼らの意見には、現役あるいは将来の働き手として実力主義で行きたいという積極的な姿勢がうかがわれる。これに対し、女

表３－17　国や道に対して望むアイヌ政策（1）

		「学校教育にアイヌ民族のことを積極的に盛り込む」　＊は和人
青年	男性	・もうちょっと増やしてもいいと思う。小中の歴史の時間に入れる程度。 ・いじめはなくならない。まずは理解されないと。小さい頃から教科書にのってれば…若い人のいじめをなくすために。 ・国で先住民族だということを教えたほうがいいと思う。 ・アイヌ側の視点、和人視点の双方を持った正しい知識での教育が前提。 ・そういう子らがいない、少ない地域でこういうことするならいいけど、クラスに1人2人のアイヌ民族の子がいたらいじめに発展しかねないので教え方が難しいと思う。
	女性	・知ることによって起きる差別もあると思う。知らなければ起きないのではないか。 ・選択教科でいいと思う。学びたい人は学ぶ。 ＊小・中学校のうちは、内容について盛り込む必要はない。高校では、興味のある人が勉強できる環境があればよい。 ＊子どもは悪い言葉を先に覚えてしまう。アイヌに関して悪いイメージがつかないようにもっときちんと正しく教えてほしい。 ＊あんまり早くに教えないほうがいいのでは？小学生よりは中学生の方が分別がついていいように思う。早く教育を受けているから、正しく知っているから差別がなくなるのか。
壮年	男性	・学校教材にアイヌ民族のことを入れることを北海道だけでもよいから（積極的に）行って欲しい。 ・人権教育を教え込むことが大事。差別することの愚かさを教える。教える先生がいないとダメ。知らない人が教えるのが怖い。下手に教えるといじめになりかねない。 ・残していくのが大事。 ・積極的でなくても少しあればいい。
	女性	・しない方がいいのでは。大切なことだが、小学生のうちはいらない。中学生みたいに意識できるように、自覚できるようになってから。（選択できるようになってから）時期は重要だし自分で自覚できる。 ・先生：知っていても上手く説明できない。必ずどちらかの側に偏った考え方になっている。 ・小学4年生でアイヌの勉強はあるが、たった2～3時間でわかるわけがない。教育は大事。 ・人権教育。アイヌを差別しない先生の養成。和人とアイヌは違うと差別の気持ちで教えるなら逆効果だから盛り込まないほうがいい。 ・甥っ子が小学校社会科でカムアウトしたのがきっかけで、いじめられるようになった。平等ということをしっかり教えてからでないと逆効果だと思う。
老年	男性	・わざわざやる必要はない。歴史の一部としてやればいい。 ・正史がアイヌのことに触れていない（間違っている）「人間は平等である」。 ・現場でどういうことが行われているのかが疑問。政治的に利用される事には否定。 ・さしつかえない、小学校のときから。
	女性	・子どもや次世代の方々にアイヌのことをもっと教えたほうがよい。 ・孫も興味があるみたい。 ・大事。日本人はあとから来たんだということをきちんと教える。

表３－18　国や道に対して望むアイヌ政策（2）

		「アイヌ子弟の大学への進学機会を拡大する」
青年	男性	・奨学金は○、優先入学は× ・それだったら逆に勉強しなくなるんじゃないか、枠を決めると。勉強した人に奨学金を与えたほうがいい。 ・奨学金あってもいい。優先入学制度は特別視に繋がるからやめた方がいい。 ・支度金があればいい。優先入学に疑問有り。
	女性	・アイヌだけで困っているなら助けるべき。 ・奨学金はいいけど、優先入学制度はアイヌだけを特別視する逆差別。 ・アイヌ民族について学ぶのであればいい。そうでなければ差別。 ・フィンランドのサーミ大学は、民族が優先的に入る大学で、アイヌにもそういう大学があればいいと思う。
壮年	男性	・子どもが多いのでこうなってくる。優先入学は子どもの意志で行くのであれば、大学に行かしてやりたい。子どもの判断に委ねる。 ・拡大することでなにかのきっかけになるのでは？実力で入ればいい。自分が努力したから。 ・援助してくれるなら嬉しい。もらえるものはもらえたら嬉しい。 ・気持ち的には嬉しいが、それが偏見になってしまうのではないか。
	女性	・子どもの高校：優先入学は厳しい。入学したとたんにアイヌというレッテルを貼られることが差別につながるのでは？色メガネはいやだ。 ・大事な話ではあるが、アイヌであることが他者に分かるようなやり方では、差別を助長する。 ・息子は受けているが30万足りないのでバイトで補っている。 ・奨学金：今は中途半端な金額。完全に余裕をもって勉学に励めるくらいの金額にしてほしい（バイトとかして、勉学に身が入らない）。専門学校の補助が特にない。 ・アイヌだからバカという差はないはず。優先入学制度はいらない。
老年	男性	・お金がないため、これは必要。 ・特別ワクをもうけるな！ ・そういうのはしてもらった方がいい…。友達の中には大学へ進むような人もいるので。 ・優先入学制度について、まずは子どもの積極的な姿勢が欲しい。甘やかすな。 ・アイヌ特別枠は、入ってから勉強についていけなくて困る。かつての先例での失敗（がある）。
	女性	・借りる時の条件がうるさすぎる。そこを少しゆるめたら奨学金をもらいやすくてよい。 ・アイヌにかかわらず、皆、最低限高校まで行けるように。

性においては、必ずしも支援を否定せず、「自立への支援があってほしい」という願い・期待として語られる場合が多い（表３－19）。自分を働き手として規定する（男性）か、それとも家族として働き手を支える立場に置く（女性）か、の違いがここの態度に現れているように思われる。

アイヌ政策としては、この他、アイヌ文化・伝統を保護、育成、普及、利用、尊重することに関わる政策（表３－16中、ウ、エ、オ、カ、ク、ケ、コ、サ、シ）と、アイヌの人々の意思を反映させる回路についての政策（ス、セ）が提示されている。賛否を問うた結果をみると、しかるべき政策を得てさらなる発展を目指したいという基本的な点においては、人々の考えは概ね一致しているといえる。しかし、そこには、さまざまな懸念や疑問が投げかけられている。たとえば、前者のアイヌ文化・伝統に関わる政策についてはどうだろうか。遺骨の慰霊については、「施設をつくるのは税金がかかる。それこそ税金の無駄遣い」（30代男性）や、「アイヌ側ができればお金を集めて自分たちで慰霊碑の設備を。自分たちでやらなきゃだめだと思う」（40代男性）といった慎重な意見がある。土地の返還についても、「アイヌがシャモを逆に差別する。およびアイヌの孤立という線引きはやめた方がよい」（50代女性）といった懸念が示されている。また、公有地や川の利用については、「食べる目的じゃなく、文化でとらしてもらうのはよい。シサムの人と同じ程度に。アイヌ・和人も同じ生活するのだから、差別化できない」（50代女性）、「草木や魚をとると、えさがなくなった動物たちが下りてきて農地を荒らし、農家は打撃を受けるので反対」（20代女性）など、その目的の確認やそれがもたらす影響への言及がある。続いて、後者の、アイヌの意思反映のための方策についてみると、アイヌ政策の協議の場を設定することには賛成するも、特別議席を設けることは逆差別だとして反対する者が少なからず存在する。

表３－19　国や道に対して望むアイヌ政策（3）

		「働く場所や機会を提供し、自立できるようにする」　＊は和人
青年	男性	・アイヌ枠は必要ない。あったらそれが差別になる。 ・昔は必要だったかもしれないが、今はいらない。 ・アイヌだからって事を気にせずに働けるように（自分には経験ないが、そういう地域もあるだろう）。 ・アイヌ人のために働きやすいように場所を提供してそこで働くのは絶対嫌だ（特別扱いのよう）。
	女性	・定職に就いている人が少ない（ので必要）。 ・世間から見て自立してないなら支援を受けるべき。自分は自立しているし国に支援をしてあげると言われても「いらない」というだろう。
壮年	男性	・職業訓練行っている人もいるのになと思う。 ・機会だけ与えてやる気をなくすのはだめ。異常に頑張らないと自立できない。やる気ないのに甘えるのが多い。頑張っているアイヌはいる。シャモも負けないようにがむしゃらに頑張ってきた。他のアイヌとは離れていく。 ・自分はアイヌだからという理由で困ったことはない。 ・「保護してやる」という意味合いが強い。
	女性	・アイヌ民族だけが働ける施設を作ってもいいと思う。差別部落を訪れた際に表で働けない人の雇用ができていて、アイヌは遅れているなと思った。 ・とにかく自立できる環境に。今ある職業機動訓練のシステムは税金の無駄遣い。もっと改善して。アイヌは卒業せず、アイヌの人のためになるような、アイヌになれるようなシステムを（奨学金を得るためだけにアイヌ協会に入っている人も居る）。きちんとみんなが自立（将来、みんなが頼らずに暮らしていけるように）。 ・自立というか、世界の不況でいっそう厳しいが、アイヌの理由で就職できないなどはよくない。本当に一生懸命やることをやっているか？温泉街で伝統工芸だけではやっていけないのでないか？白老などのダンスは文化の継承ではなく、パフォーマンスに見えてしまう。インスタントのイメージが付きまとう。伝統文化を見て若い子がどう思うんだろう？と感じる。 ・若い人かわいそうだなって思う。 ・就業機会の保障。安心して暮らせる社会にしたい。
老年	男性	・それ以前に、そのためには何をすべきか。子は勉強する、では大人は何をすればよい？今からでは遅い。 ・シャモもアイヌも関係なく、仕事がないから厳しいと思う。 ・なってほしい。たとえば役所でもアイヌのまじめな子を雇用してほしい。
	女性	・出来ればアイヌ関連に置いてほしい。しかし一般的な仕事にとっても大事。 ・やはり機会が少ないと感じる。ハローワークでもアイヌは和人と別という扱い。 ・働く場所がないからあった方がいい。 ＊一般の産業振興をして欲しい。

このように、回答の内容をみると、国や道がどこまで優遇すべきか（個人の努力の問題でもある）、文化を商業的な面でどこまで利用するか、文化の普及や権利回復のための策がアイヌの人々を逆に阻害しないか、といった点も考慮されており、そこには、それらの政策がもたらすかもしれない今後の影響まで見通したうえで判断し、主体的に選び取っていこうとする姿勢が認められる。

以上のように、アイヌとしてのアイデンティティおよびその形成に関わる経験を男性・女性について比較してみると、第１に、女性は男性よりも「見られる存在」として位置づけられることが多く、それゆえの葛藤を抱えざるをえないこと、第２に、男性においては全体を見渡すような、女性においては生活に根差した視点から発想される傾向がみられること、第３に、女性のそうした視点や生き方は、時に私的・個人的な面ばかりが強調されるが、日常生活のなかで文化を伝え、またアイヌ社会の実態を鋭く指摘し具体的な課題に気づかせるという点で大きく貢献していることがわかる。彼らの社会において、それぞれの性に与えられてきた場所が同じではなく、それゆえに、経験されることもそこで形成されるものの見方・考え方も様々な点で異なっていることが確認されたと考える。

続いて、教育、就労、結婚に焦点をあて、アイヌの男性と女性がおかれている立場がどうであったのかを探る。

第２節　教育・就労・結婚

第１項　教育

教育をジェンダー視角からみるとき、そこに浮かび上がる問いは「日々の学校生活の現場が男性と女性それぞれにとってどのように経験されてきたのか」「教育達成は男女でどう違うのか」という２つに集約されよう。これまで学校教育については、固定化された性役割分業観が教育達成や進学先・専攻分野の決定に大きく関わっていることなどが指摘されてきたが、アイヌの男性・女性にとっての学校教育とはいかなるものだったのだろうか。

（１）学校生活

学校時代を振り返るとき、一般に、楽しい思い出とは平凡で誰にでも共通するものである一方、つらい思い出とは多様で個別の事情を映し出すものである。学校時代の記憶を問うたところ、楽しかった時期としては小学校から大学まで回答はさまざまであるが、いずれにしても、地元の仲間や学校の友人との親しい交流の思い出をあげる者が多い。これに対して、つらかった時期として小学校時代をあげる者は僅かにすぎず、中学以降をあげる者がほとんどである。それらは、思春期以降、自分の出自、家庭、容姿などについての自覚が生まれつつあるときに経験されたものである。それらのつらい経験は大きく３つに分けることができる（表３－20～22）。

まず１つは経済的な苦労である（表３－23～24）。家計が苦しく、通学や日常生活に必要なものが十分に準備できなかったこと、家業を手伝うことを求められたこと、あるいは、家人が仕事に出られるように子どもながら家のことを分担させられたこと、である。若い世代になると、奨学金制度も徐々に整い利用者も増えてきたこと、教育の重要性についての親の認識が高まったことによって、「学校を休まなければならなかった」という経験をした者は見あたらないが、それより上の世代においては、経済的に余裕がない、というより、正確に言えば「貧しさ」によって不便と屈辱を味わったという者が少なからずいる。男性においてそうした苦労が多く語られているのは、家の手伝いが農業、馬車追いといったきつい労働であった場合、女性よりも男性に労力提供が求められたからと思われる。

表３－20　学校時代つらかったこと（1）

		経済的な苦労・家の手伝い
青年	男性	・大学は働きながら。 ・お小遣いがないのが、ちょっとつらかった。
壮年	男性	・歩いてゆくのがつらかった（普通はバスを使う距離）。 ・中高生で服がなくてつらかった。デートに誘われても断った。 ・学校を休んで農業と馬車追いの手伝い。 ・家が貧しく着る物、持ち物が他人よりもいいものは持てなかった。
	女性	・盲腸で入院。家が貧しいことがつらかった（稲を借りたり、生活保護を受けたりすること）。 ・バスケの高いユニホームを母に「買って」と言いづらかった。母が苦労して貯めたお金を使わせるのは申し訳ない。 ・ジャージがないとかは嫌だった。他の人が羨ましかった。
老年	男性	・食料難、家族でオオバ、ユリ根、笹の実を取りに行った。夏になると取るものが少なくなった。 ・学級費がなかなか払えなかったり、持っていけない。1/3くらいの生徒は払えなかったのでは。アイヌ民族の子が多かった。 ・家の仕事の手伝い、食べ物がなかった。学校に弁当を持っていけなかった（山で食料を探したり、スイカを畑から盗んで食べた）。 ・学校に行きたかった、親に手伝えといわれて行けなかった。
	女性	・経済状況が悪かった。 ・宿題などは家の事でさせてもらえなかった。こっそりやっていると電気代がもったいないと怒られた。 ・家計が困っていたのをからかわれた。

表３－21　学校時代つらかったこと（2）

		勉強が重荷・不得意・嫌い
青年	男性	・勉強内容はつらかった。 ・資格を取るための勉強。 ・いじめがあった。頭も悪かったから。
壮年	男性	・学校の勉強はしていない。教科書もらったその時読んだきり。 ・中学に入ると町なかの大きな学校になった。その時、基礎学力が身についていなかったので何を勉強したらよいのか分からなかった。高校に行っても赤点を取ることがあり、つらい気持ちになった。
	女性	・卒業できるかどうか辛く思った。 ・高校のときは、時間がもったいないと思った。履歴書に書くほどの高校でないと思った。 ・勉強。父が不在（仕事）、子守で兄弟多く学校行ってないし聞いてもわからない。 ・勉強が嫌いなだけ。
老年	男性	・学校で勉強が得意でなかったので、進級がつらい。 ・高校時代の勉強の苦労。 ・（家の仕事や妹の世話で）学校を2週間休んで、勉強についていけなくなった。
	女性	・中学までは成績がよいと思っていたけれど、高校に行ったら全然だったから勉強するしかなかった。 ・両親が仕事をしていたので休みがち、年に数日しか出席できなかった。 ・頭が悪いので勉強が嫌い、みんなと同じくらい勉強はしたかった。

表３－22　学校時代つらかったこと（3）

		いじめや差別
青年	男性	・いじめ、特定の人にいじめられた。 ・中学1年生の2月～3月の時に3人組にかつあげされた。殴る、蹴る、の暴力を受ける。授業がきっかけで、アイヌ民族であることを理由にいじめられたかも知れない。 ・中学時代のこと。相手は、ふざけ半分だったと思うが、言われ方はそうでもなかった。言葉の暴力だった。深刻だった。集団だったり、1対1だったり。
	女性	・先生が決め付けてかかるので嫌いだったため学校あまり好きではなかった。 ・中学校時代のいじめ（特に3年のとき）。 ・祖母に踊りに連れていかれたりしたことで、周りの注目の的になるのがとても嫌だった（小学生の時）。中学の時、ふざけ半分でアイヌをからかったり、いじめたりしている人を見て、自分がアイヌの家族だとバレたくないと思った。これらのことがトラウマになっていて、今でもアイヌの人と関わるのが嫌だ。
壮年	男性	・教師（和人）も含み1クラス35人の約半分がアイヌでアイヌと和人でケンカしていた。その中で泥棒事件が発生し誰かに物を盗まれた。その責任が理由もなくアイヌ6人の生徒に押し付けられた。
	女性	・毛が薄いほうだったがストッキングの毛を指さされたことがあった。強気で行かないといじめの対象になった（睨みつけたらやめた）。自分はアイヌだからだと思っていた。自分の中で何か言われたりしたときにアイヌと結びつけている可能性がある、それはずっと頭の中にある。 ・小、中、高校で本に出てくるアイヌのこと。同級生たちは毛深さや汚さを誇張していたのでそれはつらかった。 ・男子に毛深いことでバカにされた。アイヌに多い名字だったのでシャモかアイヌかと噂されていた。
老年	男性	・弟は自分のいない時にいじめられていた。本別の奥のほうにアイヌがたくさんいて差別されていた。 ・小1からいじめられた（ア、イヌが来たと言われた）。 ・学校のストーブで暖まると体から湯気が上がり、「朝鮮アイヌから湯気が上がった」と同級生から言われたので一番つらかった。 ・穂別高校は2割ぐらいアイヌで、皆素性を明かさなかった。「知られたくない」という気持ちはあった。 ・中学校は差別があった。アイヌは3・4人しかいない。親に言わない、1対1でケンカ→大勢（でのケンカ）、先生は何も言わない（自分から言ったことはない）。
	女性	・差別いじめ。つらかった。銭湯に行かなかった。 ・いじめ。学校に行きたくない。団体行動。言葉の暴力。無視される。手をつながない。 ・アイヌ同士でのイジメがあった。相談できる相手もいなかった。 ・先生から差別された。（学校を休みがちで）たまに顔を出すと嫌な顔をされた。何でも後まわしにされるなど差別された。先生によって対応がすごく違う。 ・クラスにアイヌは1人しかいなかったので理由なくいじめられた。 ・先生にも軽蔑されたし、周りからも魚臭いといじめられた。 ・友達では泣いて帰る子もいた（いじめられて）。まねして帰りたいっていう思いもあった。自分はいじめの対象になることは少なかった。

表３－23　中学卒業のころの暮し向き　　単位：人

		豊か	普通	苦しい	その他	無回答	計
青年	男性	2	4	6	5	0	17
	女性	0	7	3	2	0	12
壮年	男性	0	3	10	4	0	17
	女性	5	5	9	4	2	25
老年	男性	2	0	11	9	0	22
	女性	3	1	7	8	0	19
合計		12	20	46	32	2	112

表３－24　中学卒業時の家庭の暮らしぶり

		経済的な困窮、生活上の苦労について
青年	男性	・ファミコンなど持てるようになるのが遅かった。ボロイ家。電気が止められる。 ・その時母子家庭で裕福ではなかった。 ・父がトラック運送の自営業で生活は苦しかった。「どん底」で明日食べる米がないような時期もあった。 ・厳しい。母子家庭だったから。 ・家計は苦しかった。
	女性	・町営住宅に入る前はボロボロの家だったので「うちってビンボー？」って思った。 ・高校卒業後進学できないほどの貧乏だった。
壮年	男性	・小学1年で父が死に、母が中学1年で事故。その為、春・秋は学校を休んで農業を手伝っていた。家で食べるものもなかった。ごはんは食べれていたが飽食はできなかった。母は3人の子を女手一つで。 ・兄弟が大勢いたので苦しかったと思う。父は大工、母は専業主婦。食べ物はあったが着る物が不足していた。 ・小6の時、両親離婚。中1の時は、納屋で寝たり。父は教育に無関心。離婚して働かなかったから、農地解放で貧しくなってしまった。友の家を転々としていた。周りと比べて貧しかった。 ・子どもの頃に小遣いをもらったことはなく、中学校は町の中学生用の寮に入っていたときもあった。ただ、寮にいないときは夜の11時か12時まで加工場で働いていた。 ・貧乏だったと思う。平均的な貧乏。
	女性	・他の世帯に比べて貧しいと感じた。丁稚奉公にも行った。村自体には電気が通っていたがランプ生活であった（小6の時には電気が通っていた）。テレビがなく、親戚の家にテレビを見に行った。 ・上・中・下の下の方だと思うが苦とは思わなかった。当たり前だと思っていた。欲しいものも買えない、友達に借りたり姉に譲ってもらったりした。就職もする。これは当然と思っていた。 ・父は、仕事が無職。肺結核を患っていた。周りのアイヌの人より生活が苦しいと言っていた。そのため、お米とか野菜を母の実家からもらっていた。栄養状態や不衛生から肺病になったのだろう。 ・父（民芸品を売って生活していた）が亡くなり、兄が高校に行ってた時期です。すごい貧乏だったと思う。稼ぎの中心の母親は木彫りの仕事。 ・母が14で亡くなり、父が1年後蒸発（その後時々戻ってきて困らせた）、下に弟・妹もおり米も買えないほど大変な暮らしだった。周りが助け、祖母もいたので何かと力になってくれた。金銭面・家事など。 ・何にも買ってもらえなかった。ボロボロな衣服。最低限の生活はできたが。
老年	男性	・暮らし向きは全体を通して悪かった。現金がなかったので卵や小豆を店で換金して授業料を納めていた。おなかが減ったことはない。食品はそれなりにあった。 ・母が死んだ後、2歳年上の姉と2人暮らしで、野菜などを畑から盗んで生活していた。お金や穀物がないので、魚が買えなかった。うどんしか買えなかった。あわやひえ、ジャガイモ、とうきびを食べていた。 ・13歳の1月に父親が病死し、4月に母も病死。14歳の時に、一緒にくらしていた孫ばあさんも死去。14歳の時に、3つ上のいとこのつてで郵便局に臨時採用。3ヵ月後に正式採用。自分の稼ぎと農作業のアルバイトで生活していた。 ・小学校5年生からあまり学校に行けなく、半分くらい農家の手伝いをしていた。 ・すごく苦労した。姉は中学にも行っていなく、食べるものも少なかった。
	女性	・母親と兄弟で暮らしていた。母親が出面（日雇いで造林の仕事など）、家にいなかったので寂しかった。 ・漁師。分家の方だった。200カイリの頃にしんも獲れなくなった。本家の漁師を継いだ。大量にイカを獲ってくると学校を休ませられる。するめ作り。12月はじめまで寒干し。兄弟全員で手伝う。 ・かっぱも傘もなくてオーバーを着ていた。学校へ通うのは1時間。夏は100円の下駄を履いていく。 ・着るものもボロボロ。大変だった。 ・勉強道具がなかった。買ってほしいとも言えなかった。 ・中学校はあまり行かなかった。他の女の子は奉公へ。自分も奉公に出た。

２つめは勉強の苦労である。そもそも勉学に適した環境で育っていないことから勉学になじめず勉強が嫌いで不得意、という者もあるが、加えて、家の手伝いをするために学校を休まなければならなかったり、帰宅後に家の手伝いをするために宿題をする時間がとれなかったりすることで、さらに勉強についていけなくなった者も多い。

３つめはいじめや差別である。自らがアイヌであることを周囲に明かしていないために差別を静観せざるをえない場合、自分がアイヌであることを本人が知らないために同胞を差別することになってしまっている場合、自分がアイヌであることを本人は知らないが他のアイヌがそれを知っており、アイヌがアイヌを差別する様子を批判的に見ている場合など、「アイヌであること」をめぐる状況は複雑である。従って、そこにうまれる思いもまた複雑であり、アイヌの人々同士が無条件に強い絆で結ばれ、怒りや連帯を共有していたとはいえない（「自分は、直接差別にあっていなかったのと、アイヌであることを知られて居なかったので学校では話さなかった。ただし、いじめる側にもアイヌはいた。こういう人は、自分がアイヌであることを知らないで居た。（ポロトコタンなどで誰がアイヌかどうか聞いていたので、クラスの中の誰がアイヌか知っていた。）」30代男性）。

いじめや差別の経験を性別にみると、女性の場合はけんかをするといった直接対決はなく、言葉によるいじめや無視という形が圧倒的に多い。そして、男性になく女性にあるものは容貌に関する悩みである。毛深いことを理由に嫌な思いをしたことをあげているのは女性だけである。容貌についての悩みは周囲が思うよりも本人において深刻なものである。相談できないままに封印されていったものもあろうと思われ、本調査においても語られなかったことがあったと推察される。

こうしたつらい経験については、男性、女性ともに、誰かに相談して解決を図るというよりは、時間が経つのをじっと待って何とかやり過ごした者が多い。卒業まで我慢すれば解放される。彼らはこのように決して快適で楽しいとはいえない学校生活を送ってきており、当時は生活に余裕がないことや勉強嫌いだったことから、さらなる学校生活、すなわち進学に対して意欲的になれなかった者もいたようである。しかし、希望していた教育達成を問うと、中卒ではなく、性別問わず、高校以上を望んでいたと回答する者が多く、今となれば、心安らかに勉学に専念できる学校環境と家庭環境があれば、進学を果たして、現在の生活がもっと違っていたのではないかという思いを抱いている。では、実際の教育達成はどうだったのだろうか。

（２）進学状況

義務教育進学者は全世代を通してみると男性、女性とも９割超であり、これはわが国全体としての数値とほぼ同じである。義務教育を修了していない者は主に老年層であり、青年層と壮年層に限定すると男女ともに全員が義務教育を修めていることから、この教育段階についてはアイヌの人々が特段の不利な状況におかれているとはいえない。問題は義務教育以降の後期中等教育と高等教育である。

わが国の高等学校進学率は1950年代前半には５割以下であったのが、経済成長が家計にもたらした経済的ゆとりや教育に対する関心の高まり等により向上を続け、1970年代半ば頃に９割を超えている。しかし、アイヌの人々の高等学校進学率をみると、そこには届かない水準にある（表３－25）。これに関して指摘できることは３点あろう。

１点目としてあげられるのは家庭の経済状況である。アイヌの人々が進学を断念あるいは選択しなかった理由を問うと、経済的理由で進学を断念したという回答が最も多い。表３－26は主な回答をまとめたものである。豊かとはいえない生活のなかで、進学を望んでいても諦めざるをえなかった者も多かったと思われる。また、「男らしさ」という文化規範が存在し（２点目）、男女の性別役割分業的な考え方が根深く浸透していたとすれば、苦しい生活のなかで稼ぎ手としての自負をもち、また、周囲からそれを期待されたのは女性より男性ということになるだろう。ただし、その決断が常に後ろ向きの諦めであったとはいえない。というのも、彼らの学校生活についての語りをみると、成績がよかった、あるいは、勉強が面白かったと回答している者はほとんどおらず、彼らが勉強というものに親和的であったとはいえないからである。これが３点目、学校という場所や勉学に対する非親和性である。

つまり、学力の低さという現実もあり、学歴によって出世していこうとするアイデアがもとより採用されなかったという見方も成り立つ。むしろ、早く経済的に自立すること、就労して家計に貢献し、親やきょうだいの役に立つことに価値を置く考え方が本人と家族とに共有されていたのであり、ある意味では積極的に進学が選択されなかったということもできる。子どもは身近な大人

表３－25　後期中等教育・高等教育進学　　単位：人

		高校進学者（卒業＋中退）		高等教育進学者（大学の卒業＋中退＋在学中）		高等教育進学者（専修学校および大学の卒業＋中退＋在学中）	
青年	男性	13	(76.5%)	6（短大2）	(35.3%)	12（短大2）	(70.6%)
	女性	12（3）	(100.0%)	4（短大2）	(33.3%)	5（短大2）	(41.7%)
壮年	男性	14（2）	(82.4%)	1（1）	(5.9%)	5（1）	(29.4%)
	女性	18（3）	(72.0%)	0		5（1）	(20.0%)
老年	男性	7（1）	(31.8%)	2（1）	(9.1%)	2（1）	(9.1%)
	女性	3（2）	(15.8%)	0		2	(10.5%)

注）（　）内の数字は和人

（親）をロールモデルとして成長するが、学校において支配的な業績主義的価値観を家庭内で伝えられることなく学校に放り込まれれば、勉学に向かう態勢も十分でなく、ゆえに成績も上がらず、さらに学歴のもつ意味もよく理解されず、結局のところ進学意欲が高まらなかったとしても致し方ない。ここには、彼らの親世代の教育歴が低く、子どものためのこうした教育準備ができなかったことが大いに影響していると思われる[4)]。

この進学率はたしかに若い世代になるほど高くなる。とはいえ、青年層であっても男性８割弱、女性９割であり、高校全入時代と呼ばれる時代にしては低い数値といえる。というのも、平成21年度学校基本調査によればわが国の高等学校進学率は96.9%（男性96.8%、女性97.0%）、直近５年の結果をみても、男女とも97%前後に達しているからである。この数値と比べると、本調査におけるとくに青年層男性の高等学校進学率は低い。なぜだろうか。

それを説明するものとして、教育格差の世代間連鎖をあげることができる。もっとも、老年層や壮年層の時代に比して社会全体が豊かになったことを考えると、経済的理由で進学をあきらめなければならない者は当然減ってきたと考えられる。事実、青年層になると、経済的理由によって進学できないというより、勉強嫌いによって進学しないとの回答が散見されるようになる。つまり、

表3－26　進学を断念あるいは選択しなかった理由

		理由
青年	男性	・考えたことがあったけど、勉強が苦手で諦めた。 ・大学に行きたかったが学力、やりたい事がない等の理由で断念。 ・勉強が嫌いなので考えなかった。 ・早く働きたかった。勉強が嫌いだったから進学はしたくなかった。 ・自分の意向で専門学校へ進学。自分の意志で親の仕事を継ぐことを決めた。 ・両親の薦めで高校を受けたが、高校に行くより働きたかったのでやめた。今思えば行っとけば良かった。
	女性	・金銭的にいけなかった。 ・勉強する気がなかったから。勉強が嫌い。 ・考えなかった。
壮年	男性	・進学校だったし進学したかったが、進学しなかった。下に弟がおり経済的に大変で。 ・家の事情からムリだった。貧乏な人は行くなと思った。 ・親の経済的な理由で行けなかった。 ・お金の問題で断念。出来るなら留学でもしたかった。 ・今考えればもうちょっと勉強すればというのはある。 ・高校の頃大学に行きたくて受験をした。合格もしていたが家庭が貧しくあきらめた。叔父（母の弟）から援助の話もあったが、迷惑をかけられないと思い断った。 ・末っ子だったので、経済的理由から。兄が私立大学に通っていたこともある。 ・家庭の事情で働かざるを得なかった。兄のお金で訓練校。弟の為に働く。 ・大学まで進学したかった（経済的な面で断念）。
	女性	・姉が中学校を卒業して紡績工場に出ていったので無理なことは承知していた。高卒より上に行きたかったけど、選択はなかった。 ・看護婦になりたかったが、准看から始まり大変そう、頭もないし、医療関係に携わりたかったので医療事務の専門学校に入った。 ・親に経済的なことを言えない。上の姉2人もすぐに就職したので当たり前と思っていた。 ・看護師や美容師になりたかった。経済的理由で行けなかった。 ・高等学校への進学はしたいと思わなかった。親の思いも手伝い、手に職をつけたいと思った。 ・勉強が嫌いだったので。もし「大学に行きたい」と言っても、金銭的に無理だったかもしれない。 ・学校は行きたかった。大学へ行って好きなことを勉強したかった。断念は経済的な理由。
老年	男性	・予備校に行っていたが、お金がないと阿寒にいる親に言われ東京に戻り姉の手伝いを始めた為、進学をあきらめた。お金があれば大学に行きたかった。 ・親から暗黙のうちに上にはやれないと、奨学金の話は学校であったけれど、学校に行きたいとも思えない雰囲気だった。進学したい気持ちもあまりなかった。早く働いて、好きな時に好きなもの、つまりは銀シャリを腹いっぱい食べたいという気持ちだった。 ・勉強が嫌い。まったく考えなかった。 ・学力的、経済的理由から断念した。もしもそれがあったら高校くらいは出たかった。 ・家族が多くて高校に行くだけのものはなかった。働かないと小さい弟らがいたから。8人兄弟の長男、弟6人で姉1、妹1人、責任があって大変だった。 ・祖父母を楽にさせるために働く必要があったから。 ・仕事に追われてなければ高校に進みたかった。勉強したいという気持ちはあったが、そう思う余裕もない（食べることもできない状況）。
	女性	・思ったことがない、きょうだい7人の2番目で生活がままならないから。 ・資金的に行けなかった。 ・第一希望は薬剤師だがお金がかかるため断念。次が教育大学だったけれど、そこまでのレベルではなかった。四年制大学はお金がないということで、お金がかからないところということで看護学校を見つけてくれた。 ・周りが皆奉公に行くのだから自分も行くことしか考えなかった。 ・親に迷惑（負担）をかけたくなかった。 ・親が困っていたので考えもしなかった。家の手伝いをした方が良かった＋学校へ行きたくなかった。

＊ここではどの教育段階（義務教育、高等学校、専修学校、短期大学、大学）における「進学」なのか限定せずに問うているため、回答によってはその点が曖昧なものもある。

近年は、勉学への非親和性を肯定するようなメンタリティが根付いてしまったことの方が、男性を進学コースから撤退させる理由としてより強く働いているように思われる。ただし、そこには、諦念に支えられた自己防衛的な態度を認めることもできる。教育の重要性がいわれる現代社会において、そして、教育熱心な和人の社会との決定的な差が定着しつつあるなかで、勉学に背を向けた発言をすることで自分の生き方を肯定せざるをえないということである。このようなメンタ

リティが女性よりも男性において強く現れるのは、男性に期待される教育達成の方が高い状況があり、そこにおいて男性には常に人生の選択について主体的な態度を見せることが求められてきたためではなかろうか。そうした態度をとらざるをえないほどにアイヌ男性は教育から疎外されてきた（いる）ということもできる。

次いで、高等教育進学についてはどうだろうか。大学（短大含む）進学率についてみると、青年層においてさえ、男女ともに４割に達せず、女性の進学率は男性よりさらに低いという結果である。若い世代になるほど高等教育への進学率は上昇するが、女性の場合、男性に比べて上昇のペースが非常に遅く、男性に追い付かない。これは、わが国全体の大学進学率と比較すると格段に低い数値である。というのも、日本における大学進学率は、高校進学率と同様 1970 年代半ばまで急増し、いったん微減傾向に転じるものの 1993 年には 40％超、2005 年以降は 50％超となり、高卒者のおよそ半数が高等教育に進学する状況が定着しているからである。2009 年の大学進学率（短大含む）は 50.2%（男性 47.7%、女性 52.8%）（『平成 21 年度学校基本調査』）である。

このような全国レベルの動向と比較すると、アイヌの人々の高等教育進学率が５割に遠く及ばず、とくに女性の進学率が低い実態はまさに教育の格差といえよう。この教育格差が生じる理由としては、高等学校進学と同様、３点指摘されよう。１点目は経済的事情である。大学４年間の学費に加えて、進学のために地元を離れざるをえない場合などは、大学生活にかかる費用を捻出できずに進学を断念せざるをえない者も多かっただろう。高校卒業後の進路として大学・短大に加えて専修学校も含めると、進学率が青年層において男性 70.6%、女性 41.7% にまで上昇することをみると、高卒後さらに教育を受けさせたいと思う親は一定数いるものの、修業年限の短さや就職に直接結びつく実学志向あるいは地元での進学可能性により、結局は大学（短大含む）進学が選択されなかったものと考えられる。その際、この実学志向を支えていたのが、経済的事情だけではなく、２点目、勉学への非親和性と現実としての学力の低さ、幼いときから積み重ねられてきた「勉強嫌い」「勉強への忌避」的心性だったと考えられる。

しかし、１点目と２点目以上に大きく影響していると思われるのが、３点目、ジェンダー規範である。すなわち、大学進学率における男女の格差は、大学進学の切符が男性に優先的に与えられた結果と考えることができる。なぜなら、前述のような「男らしさ」「女らしさ」の規範、すなわち、男性に一家の中心的な支え手としての役割を割り振る規範は、男性に対して稼ぎ手としての役割を期待しつつ、その役割遂行に必要なより高い教育達成がひとたび目指されたときには、男性を優先して進学させるという形で機能すると考えられるからである。青年層男性における高等学校進学率は女性に比して低めであったが、高校進学が果された男性に対してはさらに上の教育段階を目指すことが促される。たとえば、親から大学進学を勧められたとの回答はそもそも少数（２ケース）であるが、いずれも男性である。しかし、進学する本人がそれを熱望していたかといえば必ずしもそうではなく、当該ケースは自らの進学希望がかなったというよりは親の希望に従った進学である。「母親が「大学へ行った方がいいよ」と言ったので進学」（20 代男性）、「大学進学は親の希望だった。親はともに中学校を卒業して就職しており、高校には行けなかった。ウタリ対策があることを祖父母らは知らなかったので行けなかった。自分は、高校卒業して調理師になりたかった。大学を受けて、落ちたら調理師の専門学校に行こうと思っていたが、滑り止めの大学が受かったのでそちらへ行った」（30 代男性）といった言葉がきかれた。女性に対する教育期待がそれなり

にあるとしても、限られた経済力のなかで女性の進学は後回しにされ、その結果、高等教育進学率においては男女が逆転することになったと考えられる。

その場合、アイヌの人々にとって進学の際に大きな助けとなったのがウタリ対策奨学金である。奨学金の受給状況をみると、男性は４割、女性は７割弱である（表３－27）。この数字だけをみると女性の受給率の方が高いように思われるが、実は受給の有無に関する回答には、自身が受給した場合と自分の子どもが受給した場合とが混在している。子どもの受給の有無は女性が回答することが多く、自身の受給に限定して男女を比較すると、受給率は男性において高いという結果であった。勉学への奨励が女性より男性に対してより積極的におこなわれてきたことは多くの研究が指摘するところであるが、アイヌの人々についても同様であったといえる。ある老年女性は「短大に行きたかったが「女に学問はいらない」「自分でためるならいいけど」」と言われたと答えており、年長世代においては女性の教育への理解はまだ不十分だったことをうかがわせる。ただし、現在壮年期にあたる対象者についてみると、自分の子世代については、男子だけに選択的に奨学金が利用されるということはなく、女子の進学にも利用されており、高等教育進学の男女格差は小さくなりつつあると推測される。

しかしながら、この奨学金制度を利用しなかった・利用できなかった人々も存在する。利用しなかった理由としては、「この制度がまだ整備されていなかった」「受給資格がなかった」（「当時北海道に居住していなかった」「ウタリ協会のメンバーではなかった」）といったことを除けば、「知らなかった」という回答が多い。親自身の教育水準が義務教育以下である場合、高校以上の学校への進学準備の基本的知識が乏しかったという事情もあろう。とくに、従来、子どもの教育にまつわることが母親の務めとされてきたことを考えれば、世知に疎い母親であった場合に、奨学金の存在に気付かなかったり、手続きがうまくできなかったということも可能性としてはありうることであろう。

このように、アイヌの人々にとっての学校教育をみると、学校はアイヌの人々がいじめや差別を経験する場でもあり、自分が直接の被害者にならずとも、そうした状況を身近に見聞きせざるをえない場所であった。そうした環境において、経済格差が教育格差に連動し、それが世代を経て再生産されていく。加えて、そこには、社会において男性と女性に求められる役割の違いからくる教育期待の差が存在し、それが教育達成における男女格差を生みだし、男性に比しての女性の教育達成の低さという結果をもたらしてきたのである。

表３－27　ウタリ協会の奨学金の利用(本人＋子ども）　単位：人、％

		有	無	無回答	合計	利用率
青年	男性	9 (9)	8	0	17	52.9 (52.9)
	女性	6 (5)	4	2	12	50.0 (41.7)
壮年	男性	9 (5)	6	2	17	52.9 (29.4)
	女性	24 (5)	1	0	25	96.0 (20.0)
老年	男性	5 (0)	10	7	22	22.7 (0)
	女性	8 (0)	6	5	19	42.1 (0)
合計	男性	23 (14)	24	9	56	41.1 (25.0)
	女性	38 (10)	11	7	56	67.9 (17.9)
総計		61 (24)	35	16	112	54.5 (21.4)

注）（　）は本人のために利用した者の内数。壮年男性１人のみ本人と子どものために利用。

第２項　就労

（１）就職

職業もまたジェンダー研究において注目される重要な問題のひとつである。教育の世界と同様、職業の世界においても、男性と女性は異なる場所に位置づけられてきた。一般職と総合職、会社での処遇、パートや派遣の働き方、昇進・キャリア、育児・介護休業制度の利用などをめぐって、女性と男性が異なる職業経験を重ねてきた経緯は多くの研究が実証してきたところである。アイヌの男性と女性についてはどうだったのだろうか。

前述のように、彼らは教育段階が上がるに従って、経済的苦労や勉学嫌い、差別･いじめを経験し、学校生活や学業成績への関心を低下させ、むしろ早く稼いで自立したいという思いを強めていく。経済的理由で進学希望が挫かれた者もたしかにいるが、一方で、職業に就くことでそれを挽回しようという積極的な姿勢もみられた。しかしながら、彼らは、働いて稼ぐことに強い関心をもっていたとしても、「何の仕事をするか」ということに関してまでは具体的な目的や志をもっていたわけではない。これは、経済的な苦労を抱え、仕事を選り好みする余裕がなかったという事情によるところが大きいと思われる。「食べるために何でもよかった」という言葉もきかれた。もちろん、教育達成の低さや学力不振ゆえに、自分が望み通りの仕事につくことをはじめから諦めていたところもある。加えて、親を含め周囲の大人から将来設計の仕方についての適切な助言を受けたり、多様な職業についての情報を与えられたりする環境に恵まれなかったことも関わっているだろう。

いずれにせよ、自分が就くべき仕事の種類や内容について十分に検討する機会もなく、とくに希望するものもないならば、手っ取り早く稼げる職業を躊躇なく選択したとしても不思議はない。そして、実際に、彼らの多くは、学校への求人への応募もしくは家業従事の他は、父親、近所の人、遠い親戚、知り合い、学校教員の親戚、アルバイト先のオーナー、アルバイト先の客など、身近な人の「紹介」で職に就いており、たまたまその時に縁あった人の口利きで職業生活へと踏み出している。その結果得られた初職は表３－28の通りである。男女ともに、事務的職業従事者は少なく、非正規就業者が多い。男性においては、農林漁業自営、建設作業員、製造工員、運転手が主なところであり、女性においては、一般事務、販売員･店員、サービス職、製造工員が中心となっている。そして、その後の職歴をみると、転職に際しても、試験を受けたり、情報誌で探したりという例は少なく、友人、先輩、父親やきょうだい、親族、店の客、知り合い、檀家、教員、同級生の親といった人々の「紹介」が主なルートとなっている。

ここで、男性と女性の職歴と転職理由を見比べてみよう。男性の場合は転職の理由として給料の安さをあげる者が多く、不満が募っていたところに声がかかり新しい仕事に移るということが繰り返されている。転職を重ねても不安定な就業形態で働いている者が多いが、中には、少ないながらも、転職がキャリアアップにつながっているケースもある。これに対して、女性の場合は、親による地元への呼び戻しや、結婚･離婚や子育てなど家庭の事情優先の転職・退職・復職があり、転職が収入増、キャリアアップ、よりよい労働環境を実現できるものとは必ずしもなっていない。この点は男性と異なる。従って、男性が職業生活を積み重ねながら、「稼いで自立すること」をもって自分に自信をつけていくのに対して、女性はそうした経験をもつ機会に恵まれない状況におかれてきたといえる。

ただし、看護師、美容師、理容師といった国家資格を得て働き続けている者もわずかながらみ

表３－28　初職

		内容
青年	男性	介護、塗装、ネット技術サポート、警備アルバイト、新聞配達、自動車工場、ガソリンスタンド、レストランの調理師、人材派遣、製造業、漁師、電気工事、トラック運転助手、造園業
	女性	洋服販売員、カラオケの店員、美容関係、役場の発掘調査、保育、ウエイトレス、小売店販売、農協生産部アルバイト、林業事務（家業）
壮年	男性	発掘現場、自動車整備、電報配達、自衛隊、ディスコ店員、大工、ブロック工場、ホテルのカフェ、建築関係、土木関係、漁業、化粧雑貨セールス、運転助手、製造業（車の部品）
	女性	デパート受付、ホテル従業員、踊り子、経理事務、飲食店ホール担当、事務員、看護師、土産物販売店員、工場アルバイト、紡績工場工員、本屋、ウエイトレス、製造業（ビデオテープ）、大学事務、農業手伝い（家業）、病院看護助手、床屋、美容師
老年	男性	電気関係、洋服屋で丁稚奉公、子守、道路工事、家電製品販売、高校教員、水産会社、自動車整備、土木作業員、農家手伝い、農業、漁師、材木運搬、競馬関係、製材、郵便局外勤、鍛冶屋
	女性	床屋、看護師、ハシ作り、パチンコ店員、ホテル従業員、家政婦、農家奉公、薄皮工場、農業、理容師、自衛隊、事務、ベニヤ工場、保線

られる点に着目したい。とくに看護師についていえば、４年制大学進学が経済的に難しいために看護学校に進学した者もいれば、高校に進学せずに看護師（准看護師）として働き始めた者もいる。経済的理由や学力不振で進学が難しい場合、学費があまりかからず資格が取得できるとして看護学校が選択されたのである。「手に職をつけさせたい」と願う親にとっても望ましい進路であったと思われる。たとえば、「第一希望は薬剤師だが、お金がかかるため断念。次が教育大学だったけれど、そこまでのレベルではなかった。４年制大学はお金がないということで、看護学校を見つけてくれた。とにかく進学したかった。看護学校ではお金がかからなかったので。親の負担は月に2,000～3,000円のお小遣いくらい」（60代女性）といった言葉がある。「行き当たりばったり」的にみえる転職を繰り返す人々も多いなかで、とくに看護師は資格を活かして長く仕事を続けてきた者が多く、女性においては例外的に継続的なキャリア形成ができたケースといえるだろう。

（２）職業生活

このように、アイヌの人々の就職へのプロセスをみると、自分の就きたい職業が明確にあり、それを目指して就職を果たしていったのではなく、身近な人々の縁に助けられて紹介された職に就き、そしてまた、縁を得て職を替えていくという働き方が主流であった。したがって、就職や転職で大変だったことを問うても、そこには、めざす職に就くまでの就職活動上の苦労はあまり表れてこない。もちろん、これは彼らが自分の就職に満足していたということではなく、はじめからある程度の諦め、時には投げやりな気分に覆われていたということでもある。

しかしながら、就職後は、経済的自立の手段を得て、仕事に楽しさを見出していった者も多い。職業生活において楽しかったこととして世代を通じて男女とも共通してあげているのは、業績を上げたこと、職場の人間関係がよかったこと、顧客との信頼関係が築けたことなどである（表３－29）。さらに、男性と女性を比較してみると、まず、男性においては、仕事を通じて「能力を認められ、ふさわしい稼ぎを得ること」が最も重要であり、これが自分のアイデンティティを支えているところがある。したがって、仕事上の困難は乗り越えられるべきものであり、収入はもちろん、自分の技量が上がり達成感が得られることでその苦労は報われる。こうした考え方は、男性が稼いで一家を支える役割を担うという性別役割分業の規範意識が支配的であったとすれば当然であろう。それに対して、女性においては、収入を自分の能力の証と見なす回答はわずかで、むしろ、

表３－29　職業生活において楽しかったこと・つらかったこと

		楽しかったこと　＊は和人	つらかったこと　＊は和人
青年	男性	・給料が楽しみ、あまりよくはなかったけど。近い世代の同僚もいて仲良かった。 ・いろいろな人と会えた。やりがい（自分の力で売上げが上がったり、仕事の幅もある）。 ・分からないことが出来るようになる時楽しい。 ・アルバイトでお金をためて海外旅行。 ・サケ漁などの定置網漁。豊漁の時は楽しい。 ・上司に仕事を認めてもらったとき。	・初めの不安のみ（自分にこの仕事ができるかどうか）。 ・体が疲れてつらい。 ・調理師は、我の強い人がぶつかりあうので、性格が合わない時はつらかった。 ・ボーナスが低い時（あまり売れなくて）。休みは日曜日くらい。 ・業界で十何年やっているから、中間管理職、リーダーなどのまとめ役での責任がつらい。
	女性	・人と会うのは楽しい。いろんな話聞ける。 ・お金を稼ぐこと、部下を育てること。 ・接客業は楽しい。 ・生活のために仕事をしていたので、強いて言えばいろんな人に会うこと。 ＊サービス業：人間関係もよく仕事も楽しかった。 ＊信頼してくれる患者さんがいた（病院）。	・立ち仕事は体に合わなかった。 ・リサイクルショップでの人間関係のトラブル。 ・事務はつまらない。 ＊作業員のとき身内だけでやっているのでやりづらかった。 ・パートの収入が決まっていた。子どもがいるから生活費が（足りない）。
壮年	男性	・今の仕事。自分のクリエイティブ性が発揮できる。 ・お客さんが満足してくれるのがうれしい。 遊び心（裁量の自由）を持ってやるのが楽しい。 ・目に見えた成果が出た時、無理な仕入れを売りつくした時、他の人だと無理だなということをクリアした時。 ・自分の思い通りに仕事がスムーズにできた。 ＊メーカー（セールス）は自分に向いていた為、楽しかった。 ・つらい仕事であるがお金になる。	・山・川などキツイ現場の時。 ・縦社会だからつらい。 ・肉体的に大変。年の暮れは休みもないくらい忙しい。精神的に、中間管理職的立場（役職ではない）で大変。古株なので、責任のある仕事を任せられることもあり、プレッシャー。 ・気候的なこと（暑さ・寒さ・雨・風など）。人間関係でつらかったことは特になし。 ・運輸会社では休みがなく働いていた。役場（嘱託）で給料が悪い。
	女性	・人の為に働ける。 ・生命保険会社とホテル･レストランが面白かった。人とコミュニケーションするのが楽しい。 ・いいことも悪いことも含めてお店がいい方向、人間関係がうまくいった時が楽しかった。 ・紡績工場時、友達が出来て一緒に買い物等をした。 ・人が喜んでくれることが好き。 ・いろんなお客との出会いが…。客と話すのが楽しい。	・人間関係 ・札幌：人間関係は難しい。 ＊人間関係の合う、合わない。子どもがいるからやめられない。 ＊紡績工場は朝早く（AM4:30～）夜遅くまで大変。仕事自体は大変でなかったが、勉強と仕事の両立が大変。 ・生命保険勧誘はノルマがきつい。保育園は同僚と大ケンカ。 ・自分ができないのがつらくてくやしかった。
老年	男性	・今の仕事は物を作ることや売ることが楽しい。自営なので自分で思うようにできるから。 ・民族的な事情を知っている上司の方が推薦してくれて昇進できたこと。やりがいのあるセクションを任されたこと。 ・常に新しい事柄にぶつかるのでそれをやり遂げ達成したとき。 ・林道を作った。現場監督は、皆で仕事をやりとげるのが楽しい。解体作業は終わったときに達成感。 ・仕事がとれ、その仕事が完成し、約束のお金が取れた時。 ・給料をもらえるのが楽しみだった、もうかる時は楽しい。	・今は不景気なのが影響（バブルの頃よりもつらい）。 ・漢字が読めなかったり、接客の仕方が分からなかったりして仕事でミスをしてしまったこと。 ・自分で資金繰りをしなくてはいけないので経済的に大変。 ・過疎化で実家の店の客が減る。店はまわりにつぶれたと言われたくないので、とにかく開いておく。 ・造園の仕事と営業の両方ともが初めての仕事で大変だった。 造園で客にクレームをつけられ、約束のお金がもらえなかった時がつらかった。 ・差別を受けないために結果が求められ、並々ならぬ努力をしたこと。不作の時、借金を背負うから。
	女性	・集金の仕事は楽しかった。お金にもなった。子どもを連れて仕事が出来た。ハローワークは周りがよくしてくれ働きやすい。 ・患者さんと接している時は充実感があった。 ＊同僚と旅行や飲みに行ったことなど。 ・農家の人がすごく親切にしてくれた（農家住込）。 ・特に東京にいたとき（キヨスク）。大学生がよく来る。学生（アルバイト）との触れ合い。 ・楽しいことばかり。会社の旅行で仲間内で大騒ぎすること。	・今は女性ばかりの会社で、派閥があったりもするが、そう大変なこともない。 ・夜勤はつらかった。 ＊勤めたのが全部年中無休。○○バスでは男性と一緒に雪かきなど。 ・晩年、人間関係のトラブルが大変だった。 ・なれなくてさびしくて親のところに帰りたくてつらかった。 ・休みがない。

仕事をしている時間が充実しているかどうかを重視する者が多い。具体的には、仕事をめぐって良好な人間関係（同僚やお客）が得られたことを楽しさとしてあげる者が圧倒的に多い。このことは、アイヌ女性の従事していた仕事に、飲食店ホール係、ホテル従業員・レストランのウエイトレス、土産物店の販売員のように、ホスピタリティが求められる仕事が多く含まれており、そこにおいて「女性ならでは」の働きが評価されてきたことをうかがわせる。なおかつ、キャリアアップが望めるような労働現場ではなかったとすれば、業績主義的な考え方は持ちにくかったと思われる。

一方、職業生活においてつらかったことは何だったのだろうか。これは、楽しかったことの裏面である。したがって、男性においては、ノルマ達成の困難さ、不況による業績不振、上司や同僚との衝突や摩擦、身体的疲労など、仕事が自身の能力や体力を超えるものであったことに由来するつらさ（くやしさ）をあげる者が多く、女性においては、同僚との人間関係の難しさなど、関係性が円滑に維持できないことが多くあげられている。

アイヌ差別について問うと（表３－30)、学校時代と比べて、アイヌであるために差別されたという悩みをあげる者は減る。職場では生徒同士のような無配慮な扱いはなされなかったのかもしれず、また、職場周辺の人々がアイヌについて知らないゆえに差別が生じなかった、ということも考えられる。あるいは、本人がアイヌであることを周到に隠し続けていたために、差別されずに済んでいたということもあるだろう。若い世代において差別経験への言及がみられないのは、彼らの人生経験が浅いためにまだ経験していないにすぎないという見方もできるが、社会の偏見が薄れつつあることを意味するところもあると思われる。だが、いずれの状況であるとしても、全体としては、男性より女性において、差別された経験を語る者は多い。とくに壮年層の女性において、差別を受けたことは色あせない記憶として語られる。それはなぜか。ここに60代男性の言葉がある。「差別を受けないために結果が求められ、並々ならぬ努力をしたこと」。彼は「祖父母を楽にさせるために」高校に進学せず、家業の農業に従事し、現在は1,000万円以上の年収がある。言ってみれば成功者である。男性の場合は、彼のように、仕事で成果をあげることで自信をつけることができるとすると、彼らはそうすることによって差別から解放されることが可能である。しかし、女性の場合は、自分の自信をつけるほどに仕事に打ち込んだり稼いだりする機会に恵まれない人々が多く、男性に比べると差別を引き寄せてしまうところがあったのかもしれない。

では、あらためて彼らの収入をみてみよう（表３－31)。『平成20年度アイヌ民族生活実態調査』によれば、世帯収入では、200～300万円未満が最も多く、平均は355.8万円、「年収なし」を除いた収入のある世帯の平均は369.2万円である。北海道においては300～400万円未満が最多層であり、平均年収440.6万円であるのと比較すると低い数字である。この世帯年収200万円未満が５割を超す状況をつくりだしているのは、個人収入の低さである。とくに女性の個人収入が低く、今回の調査対象者においても半数が200万円未満と回答している[5)]。経済的な不安定性は、女性の生活が破綻する恐れと、さらに母子世帯の場合は、子ども世代への貧困の連鎖の可能性を示しているといえる。

このように、アイヌの人々の就職と職業生活を男女別にみると、男性にとっては、教育達成の不十分さによる限界を知りつつも、経済的自立が自信をもつことにつながっているのに対して、女性にとっての職業は自立を可能にするほどのものではなく、結局のところ、結婚までの腰掛であったり、子育ての合間に家計補助のために稼ぐ手段であったりするだけで、自分のアイデンティティ

表３－30　アイヌであることに関わる就職・転職、職場生活における苦労の有無

		苦労の内容
青年	男性	回答なし。
	女性	回答なし。
壮年	男性	・どの職場でもアイヌは居た。差別はなかった。
	女性	・和人のところで働くと普通。アイヌの所で働くとあまりよくない。 ・友達の部屋に遊びに行った時、男2人くらいいて「あなたアイヌでしょ」と友達の前で言われた事がショック。別件で姪っ子についてですが、両親ともウタリで周りから何か言われても言い返せない子。就職を2回ほどしたが年配の人からアイヌという事でいじめがあった。差別する人は今でも徹底して差別している。びっくりしている。 ・人間関係でつらかったことはいろいろある。入社歓迎会のとき、営業の人から「経理にアイヌを入れてやった」の一言。それに対して「差別する方がおかしいじゃないか」と言ったらあとで謝ってきた。気が強かったから、見返すつもりで仕事していた。アイヌは汚いというイメージで少なからず差別を受けてきた。 ・転職そのものが大変と感じることはなかった。「自分の母親はアイヌの血筋だ」とはっきり言えるようない環境で仕事ができた。先輩方も「気にすることはない」と言ってくれた。 ・○○会社は差別があったが、他は差別はなかった。 ・慣れるのが大変だった。アイヌ民族を問題にしたトラブルはなかった。ラッキーだったと思う。
老年	男性	・アイヌの血で苦労したというよりも、それ以外の仕事探しや資金調達は苦労した。 ・アイヌの子どもを持っているなど、ある特定の人から様々なアイヌ差別があった。 ・アイヌの人は焼酎飲んでだらしない人が多い、そういう人を雇うのは苦労しました。 ・差別を受けないために結果が求められ、並々ならぬ努力をしたこと。不作の時、借金を背負うから。
	女性	・民族を理由にしたいじめなどはない。 ・アイヌの人といっしょになったので機動訓練うけられると言われる。メンテナンス会社では両方にいじめられる。汚い仕事を日本人にまわされた。会社の責任者がウタリを特別扱いしているように日本人には見えるらしい。毎年会社で機動訓練してウタリの人を取っていたので。でもほとんど職責終わった時点で辞めている。ウタリ協会の事業所が間に入らないと雇用できないと言われた。 ・夜の仕事：アイヌ民族と言われるのがつらかった。

表３－31　年収（個人）　　単位：人

		なし	～100	100～200	200～300	300～400	400～600	600～800	800～1,000	1,000～	不明	合計
青年	男性	2	1	2	7	2	0	0	0	0	3	17
	女性	2	1	7	1	0	0	0	0	0	1	12
壮年	男性	1	0	0	4	4	3	2	0	1	2	17
	女性	6	4	9	3	2	0	0	0	0	1	25
老年	男性	1	4	3	3	5	1	0	0	1	4	22
	女性	4	7	4	1	1	0	0	0	0	2	19
合計		16	17	25	19	14	4	2	0	2	13	112

＊～100は100万円未満、100～200は100万円以上200万円未満、1,000～は1,000万円以上。

を支えるものにはなっていない。また、男性にとっての職業はキャリアアップしたり転職したりしながら自分の世界を広げていく可能性を開くものでもあったが、女性は庇護されてきた面がある分、自らを強くする機会に恵まれなかったともいえる。

第３項　結婚

最後に、結婚についてみていこう。結婚や恋愛をするときに「アイヌであること」を考慮した、あるいは相手がそのことを考慮したという経験の有無を問うと、全体としては約２割が経験ありと答えている。さらに、既婚者に限定して、結婚する際に苦労したことを問い、「アイヌであること」が彼らの結婚にどのくらい影響を与えたのかを確かめたところ、16 人（16.8%）が「アイヌであることによって苦労した」と回答した（表３－ 32）[6)]。年代別にみてみると、老年層と壮年層では２

割弱、青年層では１割超である。いわゆる「民族的な問題」が結婚の障害になるような事態は確実に減少しているということは言えるだろう。

若い世代では、地元を離れて進学・就職した先で相手と知り合うことも増えるため、アイヌであることが自分にも相手にもそれほど認識(問題視)されずに結婚に至る者も多い。学校教育やメディアからの知識や情報を得て、偏見などをもつことなくアイヌ民族、アイヌ問題にアプローチする人々も増えつつあると思われる。ある 20 代男性は、東京に住んでいた時、「付き合っているとき、逆に尊敬された」と述べており、アイヌであることへの人々の反応が変わりつつある兆しもみえる。とはいえ、結婚によって「アイヌであること」が配偶者や親族はじめ周囲の人々との関係を揺らがせてきたことは現実としてある。学校時代からアイヌ差別を身近に見聞きし、あるいは経験してきた者、また、差別されないためにアイヌであることを隠して暮らしてきた者にとって、結婚というイベントは自分の出自とあらためて向き合わなければならない重要な契機となっただろう。

その点について男女を比較するために回答の内容をみると、結婚について女性が抱えていた悩みや苦労は男性よりも継続的かつ深刻といえる（表３－33)。従来の結婚関係においては、妻と妻の家が夫と夫の家に対して弱者の立場に置かれることが多かったことを考えれば理解できよう。こうした状況における女性の姿勢については、具体的に２点あげられる。すなわち、１点目は、女性が結婚後も夫や夫の家に対して「アイヌであること」を隠し続けることがめずらしくなかったことである。子どもに対して隠し続けていたケースもあれば、事情を知った子どもから周囲に隠し続けることを求められたケースもある。夫となる男性がアイヌであれば、こうしたことは起こらなかったというわけでもなく、夫側が「アイヌの血を薄める」結婚を望んでいた場合などは、ア

表３－32　結婚の際に苦労したこと（既婚者95人）（複数回答）　　単位：人

		アイヌであること	経済的な問題	その他	なし	無回答	合計
青年	男性	1 (11.1%)	1 (11.1%)	3 (33.3%)	3 (33.3%)	1 (11.1%)	9
	女性	1 (16.7%)	0	1 (16.7%)	3 (50.0%)	1 (16.7%)	6
壮年	男性	3 (20.0%)	0	3 (20.0%)	7 (46.7%)	2 (13.3%)	15
	女性	4 (16.7%)	4 (16.7%)	7 (29.2%)	7 (29.2%)	2 (8.3%)	24
老年	男性	6 (27.3%)	0	4 (18.2%)	10 (45.5%)	2 (9.1%)	22
	女性	1 (5.3%)	1 (5.3%)	8 (42.1%)	5 (26.3%)	4 (21.1%)	19
合計		16 (16.8%)	6 (6.3%)	26 (27.4%)	35 (36.8%)	28 (29.5%)	95

イヌ女性を妻とすることが無条件に祝福されたわけでもなかったようである。一方、アイヌ男性とその配偶者についてみると、アイヌであることを隠して結婚することは少なく、ほとんどの場合、結婚前までにアイヌであることが告げられている。そのことで当初は妻の親族に結婚を反対されることはあっても、いったん結婚した後は周囲の人々の顔色をうかがいながら暮らすことはあまりない。女性の状況とは対照的である。

次いで２点目は、女性の場合、自分のアイヌとしての外見を気にする程度が高く、さらには、生まれてくる子どもがアイヌの身体的特徴を備えていた場合、母親となる身としてその責任を引き受けようとする、あるいは、引き受けざるを得ないとの覚悟がみえることである。アイヌの身体的特徴としてあげられるのは「毛深さ」「彫りの深さ」である。男性も将来の自分の子どもの外見

について語るが、女性の方がアイヌとしての外見的特徴による生きにくさを深く感じているとすれば、不安に思う気持ちも当然強かったと思われる。

以上みてきたように、アイヌの人々にとっての結婚とは、自分がアイヌであることとあらためて向き合わざるをえないという大きなイベントになっている。若い世代ではアイヌを特別視する傾向が徐々に薄れつつあるとはいえ、女性にとっての結婚は、依然として、「アイヌであること」を引き受ける覚悟を試される時といえるだろう。

表３－33　アイヌであることに関わる結婚の苦労

		苦労の内容　＊は和人
青年	男性	・結婚を意識したときに言わないことには済まされないと思って、アイヌであることを話した。アイヌ同士で結婚したときに子どもが（アイヌの身体的な特徴が強く出てしまうかも）どうなってしまうのか考えたことはある。
	女性	・顔立ちがはっきりしているため、年上に見られることがあった。 ・生まれてくる子どもの容姿に心配はあった。 ・結婚するときに、旦那さんにはアイヌであることを伝えてないし、今も知らない。 ＊夫には、自分がアイヌの家庭で育ったことを知られたくないと思った。アイヌの人に、夫の前でアイヌについて話された時はとても嫌だった。
壮年	男性	・アイヌの人は遠慮したいという思いはあった。生まれてくる子どものこと（毛深さやホリなどの容姿）を考えるとできれば。 ・アイヌ同士の結婚に家族から反対された。「子どもが濃くなるから」。アイヌの顔がかわいくても、アイヌと分かる顔なら「みったくない」。 ・妻に話していない。「結婚するならシャモがいいと思っていた。」「親戚がアイヌばっかりだよね。」と言われてつらかった。
	女性	・夫の両親がアイヌの血をひいていることが嫌だったようだ。20年後にも言われた。ビックリした。初孫が生まれるときスゴク嫌だったと夫の父に言われた。 ・結婚した後に義弟に「アイヌなの？」と聞かれ、夫が「違う」と言った。夫の家は古い家柄なので、アイヌの血が入るのを嫌がっているようだ。今でも言っていない。 ・アイヌ民族の人と結婚したくなかった。アイヌの血をひきたくなかった。自分が生む子どものことを考えると、嫌だった。毛深い、これを子どもに伝えたくなかった。姉のだんなもアイヌ。姪っ子を励ましてあげた（体毛のこと）。「毛はそれるけど、顔はそれない」。 ・「アイヌとアイヌが結婚したら子どもがかわいそう」と主人の親に言われた。「せっかく薄めたのに何で濃くするんだ」。父親が苦労したので子どもの見た目など気にしていた。 ・毛深いことが自分にとって大きい。そのため男性と付き合うのも臆病。 ・元夫には、自分にアイヌの血が流れていることを言わなかったが、隠そうとか、言いたくないというわけでもなかった。結婚に際して反対されたことはない。相手や相手の親は自分の親の顔を見て気づいていたのかもしれない。 ・結婚当時は妻にはアイヌであることを伝えていなかった。孫も外見的にはアイヌであることが分かる。
老年	男性	・妻の父に「アイヌには娘をやらん」と言われてショックだった。 ・「アイヌだからだめ」。地域のアイヌは酒飲みと不安定な生活が多いから信用がなかった。子どもには一切言っていない。子ども達は知らない。 ＊結婚当時妻がアイヌということを隠そうとした。結婚後1年くらいで妻から打ち明けられる。一度自分がなんの気なしに「アイヌだよな」と言ったら（ショックを受けたようで）、1～2時間程家を出た。 ・毛が濃かったため躊躇してしまった。
	女性	・三男に、「母親がアイヌ民族である」ことを言わないでくれと言われている。学校時代に毛深いことが気になっていたようだ。 ・相手に伝えてない。鵡川に引っ越してきて活動に参加して夫が気付いた。血を引いていることを伝えても何も反応ない。

おわりに

アイヌの人々の生活史と意識のありようを、男性、女性の立場にそくして検討してきた。経済的な困難や差別を受けた経験、教育達成、就労、結婚における苦労や不遇などを、人々はそれぞれ男性として、女性として受け止めている。性別役割分業的な価値観のなかで育てられ、そうした価値観が内面化されていれば、社会生活のなかで男女に異なる役割が与えられ、秩序づけられることに違和感はもたれにくいだろう。ただし、個人の多様な生き方、多様な考え方が可能になるなかで、アイヌの人々の意識のありようもまた変わりつつあると考えられる[7)]。彼らが構築する男女の関係性とそれにまつわる意識が、アイヌの伝統文化と近代のジェンダー秩序というふたつの価値観そのものの揺らぎのなかで今後どのように変容していくのかが注目される。

注

1）ジェンダー研究といえば既に多くの蓄積があるが、アイヌにおけるジェンダー問題を取り上げた国内の研究はまだ多くはなく、参照すべきものの多くは活動報告・実態報告といった方がより正確だろう。それらの中心を占めるのは、とくに女性に注目し、彼女たちを「アイヌとしての差別」と「女性としての差別」というふたつの差別から解放することを主張するものである。その場合、上記のふたつの差別を被っている状態を表すために「複合差別」（上野千鶴子）という語が用いられることがある。アイヌ女性の「複合差別」への関心は、被差別部落、在日コリアン、外国人労働者といった日本社会におけるマイノリティ集団、あるいは世界各地の先住民族・少数民族と呼ばれる人々に関する同様の問題意識と連動しながら深められつつあるという状況である。

2）表中、20 代と 30 代を青年、40 代と 50 代を壮年、60 代と 70 代を老年と表記する。青年層は男性 18 人、女性 11（うち和人３）人の計 29（３）人、壮年層は男性 17（２）人、女性 25（５）人の計 42（７）人、老年層は、男性 22（２）人、女性 19（３）人で 41（５）人である。

3）和人妻のアイヌ社会に対する見方について詳しくは、第６章を参照されたい。

4）仮に高等学校に進学したとしても、目的意識がもてず、勉学意欲の低迷ゆえに卒業に至らないケースもみられる。一例として、「父親が中卒であり、高校に行けと言われ、（自分の学力で行ける）高校に行った。何のために進んだのかわからず、２～３カ月で学校に行かなくなった」（30 代男性）という者もいる。

5）厚労省『男女共同参画白書』（H 22）においては、ほとんどの年齢層で男性に比べて女性の方が相対的貧困率（可処分所得が中央値の 50％未満の人の比率）が高く、とくに高齢単身女性や母子世帯で高くなっていることが指摘されている。

6）本調査対象者のなかには、和人配偶者をもつ者が 61 人含まれている。

7）アイヌであることの意識には温度差がある。たとえば、ある 40 代女性によれば、その妹（道外在住）は「「同じアイヌの人から中途半端（顔など）と言われる」という差別」を受けているという。その「差別」の詳細は不明であるが、個人の多様な生き方、多様な考え方が可能になるなかで、アイヌとしての意識や自覚における隔たりもまた大きくなってくると思われる。

（小野寺理佳）